

第一章 玉鬘の物語 養父と養女の禁忌の恋物語

[第一段 六条院釣殿の納涼]

いと暑き日、*東の釣殿に出でたまひて涼みたまふ。中将の君もさぶらひたまふ(子息の左中将も同席なさいます)。親しき殿上人あまたさぶらひて(君の友人の中級官僚も多数列席して)、*西川よりたてまつれる鮎(桂川から用意申した鮎や)、*近き川のいしぶしやうのもの(鴨川のゴリなどを)、御前にて調じて参らず(殿の目の前で調理して献上します)。*「ひんがしのつりどの」は、注に<源氏三十六歳夏のある日。六条院南の町(春の町)の東の釣殿。>とある。*「にしかは」は<桂川>と注にある。確かに京の西側の川だ。*「ちかきかは」は<鴨川>。「いしぶし」は「石伏」で<川底の石の間にいるところからウキゴリ・ヨシノボリ・カジカの異名。>と大辞林にある。ざっとハゼ科の淡水魚ではあるらしいが、現在の鴨川の代表的な川魚料理と言っても、やはり鮎になるらしく、此処にも「やうのもの」とあるし、具体的に何を指すかは分からない。ただ、「石伏魚」と書けば「ゴリ」を言うことが多いようなので、その辺を思うことにする。

例の大殿の君達(いつものように内大臣の御子息たちが)、中将の御あたり尋ねて参りたまへり(中将が会いに来るという事で釣殿にお出でになりました)。

「*さうざうしくねぶたかりつる(気分が晴れず眠たかった)、折よくものしたまへるかな(丁度いい所へいらっしやったものだ)」*「さうざうし」は<在るべきものが無く、物足りない思い>と古語辞典に説明される。だから不満なわけで<寂しい>とか<つまらない>とかは言えそうだが、<退屈>とか<手持ち無沙汰>という持て余し感とは相容れない。ところで、この日は猛暑日らしい。多分、その蒸し暑さが不快なのだ。だから喪失感というわけでもなく、気候が期待値に届かないという思いが不満で<気分が晴れない>という理屈は立ちそうだ。尤も、不快な気候自体が生理的に<気分が晴れない>ことではある。何も、特に「ねぶたし」の理由と考えることも無いだろう。蒸し暑い日はだるいし、快眠できずにずっと眠い、ものだ。

とて、大御酒参り(おほみきまゐり、殿は御酒を召し上がり)、氷水召して(ひみずめして、氷水を用意させなされたので)、水飯など(すいはんなど、君たちは水漬け飯などを)、とりどりに*さうどきつつ食ふ(思い思いに盛って賑やかに食べます)。*「さうどく」は「騒どく」と漢字表記され<陽気に騒ぐ、はしゃぐ>と古語辞典にある。

風はいとよく吹けども、日のどかに曇りなき空の、西日になるほど、蟬の声などもいと苦しげに聞こゆれば、

「水の上無徳なる今日の暑かはしきかな(水の上でもご利益の無い今日の蒸し暑さだ)。無礼の罪は(むらいのつみは、失礼の程は)許されなむや(ご容赦あれ)」

とて、寄り臥したまへり(殿は肘をもたれて横にお成りでした)。

「いとかかるころは(ここまで暑いと)、遊びなどもすさまじく(音楽さえ喧いし)、さすがに(そうかと言って)、暮らしがたきこそ苦しけれ(楽しみがないのはつまらない)。宮仕へする若き人びと堪へがたからむな(役所勤め中の若者たちは耐え難かろうな、)。帯も解かぬほどよ(この暑

さに、帯も弛められないのだからね)。ここにてだにうち乱れ(せめて此处ではくつろいで)、このころ世にあらむことの(最近の世相の)、すこし珍しく、ねぶたさ覚めぬべからむ(眠気も覚めそうな話を)、語りて聞かせたまへ(話して聞かせてください)。何となく(近頃はどうも)翁びたる(おきなびたる、年寄りじみた)心地して(気分になって)、世間のこともおぼつかなしや(世間のことにも疎くなったので)」

などのたまへど(などと殿は仰るが)、珍しきこととて(君たちは珍しい事と言っても)、うち出で聞こえむ物語もおぼえねば(特に申し上げる話も思いつかなかったので)、かしこまりたるやうにて(遠慮がちに)、皆いと涼しき高欄に、背中押しつつさぶらひたまふ。

[第二段 近江君の噂]

「いかで聞きしことぞや(何かで聞いたんだが)、大臣のほか腹の娘尋ね出でて(藤原殿が外腹の娘を探し出して)、かしづきたまふなるとまねぶ人ありしかば(大事にお世話なさっているようだ)と話す人が居たのは、まことにや(本当かね)」

と、*弁少将に問ひたまへば(殿が藤原家の次男である弁少将にお聞きなさると)、 *「弁少将(べんのせうしゃう)」ということは<政務書記官兼近衛次官>だろうか。注には<内大臣の次男、柏木(中将)の弟。>とある。藤原家を代表する長男の右中将が不在なので、次男に聞く、ということだろうか。

「ことごとしく(事改めて)、さまで言ひなすべきことにもはべらざりけるを(どうのこうのとまでお話し申し上げることでは御座いませんが、)。この春のころほひ(この春先に)、夢語りしたまひけるを(父が女子の夢見をしたとお話になっていたのを)、ほの聞き伝へはべりける女の(どこかで聞き伝え致した女が)、『われなむかこつべきことある(私にはその事でお話出来る事があります)』と、名のり出ではべりけるを(名乗り出て来ましたのを)、*中将の朝臣なむ聞きつけて(兄の中将が聞きつけまして)、 *「中将の朝臣(ちゅうじゃうのあそん)」は注に<弁少将の兄、柏木をいう。源氏の前なので「中将の朝臣」という呼び方をする。>とある。「源氏の前なので」と言うと、「朝臣」は<御配下の>くらいの言い方だろうか。「朝臣」は<帝に仕える者>で<帝から賜わった地位にある者>で<公職にある者>だから尊称ではありそうだが、貴族同士の同僚なら<キミ、アイツ、ヤツ>にもなりそうだし、上司に対しては<控える者>のようであり、近親であれば<兄さん>かも知れない。当時の人が便利に使ったであろう生活感までは、私にはとても分からない。

『まことにさやうに*触ればひぬべきしるしやある(本当にそう申し立てるに足る根拠はあるのか)』と、尋ねとぶらひはべりける(調べて探し出して御座います)。*詳しくさまは(詳しいことは)、え知りはべらず(よく存じません)。げに(確かに)、このころ珍しき世語りになむ(最近の目新しい世間話には)、人びともしはべるなる(皆しているようです)。かやうのことにぞ(こうしたことは)、人のため(父のためにならず)、おのづから(延いては)家損(けそん、家の恥)なるわぎにはべりけれ(になる事と存じます)」 *この「ふる」は<御触れ=広告>と同義で<表立って言い立てる>。 *「くはし」くは知らないというものの、少将は「家損」だと言う。思わしくない事態に口を濁した物言いだ。何となく上首尾ではない事柄を読者に知らせる書き方、に思える。

と聞こゆ(と少将はお答え申します)。「まことなりけり(本当なんだ)」と思して(と殿はお思いになり)、

「いと多かめる(子沢山の)列に(つらに、中に)、離れたらむ後る雁を(はぐれて後れを取った雁の子を)、強ひて尋ねたまふが(強いてお探しになるのは)、*ふくつけきぞ(欲張りというものだ)。いとともしきに(私などは子宝に、ひどく乏しいので)、さやうならむものくさはひ(そうした類の楽しみを)、見出でまほしけれど(見つけ出したいところだが)、名のりももの憂き際とや思ふらむ(私の所などは名乗り出るに足らぬ分際と思ってか)、さらにこそ聞こえね(さっぱりそうした話は聞かない)。さても(しかし、そういう話も)、もて離れたることにはあらじ(然程意外ではないな)。*らうがはしく(藤殿はご苦労なことに)とかく紛れたまふめりしほどに(あちこちに忍び歩きを為さっていたようなので)、底清く澄まぬ水にやどる月は(底が清く澄んで居ない池に映る月のように、素性の知れない女との濡れ事で宿した尊い種が)、*曇りなきやうのいかでかあらむ(暗がりでのその後の消息がよく分からなくなるのは仕方ありません)」 *「ふくつけし」は「食し」とあり<欲深い、貪欲だ>と古語辞典にある。それ自体で非難めいた語感だ。が、これを面と向かって言う場合は、非難と言うよりは皮肉とか嫌味とか揶揄のことが多い、のだろう。特に親しい間柄では、同情ですらある。雁の群れを例に引く言い方からして、事情は知っているということを暗に示しているのかも知れない。 *「らうがはし」は「乱がはし」とあり<乱雑だ、騒がしい>と古語辞典に説明されている。ただ、此处では「労がはし」でく忙しく、ご苦労なことに>と読んだ方が面白い。なお、客観的な分かりやすさを狙って勝手に「藤殿」と補語したが、こう言い做してしまうと殿が「藤殿」以外の勢力を見ていたかのような書き方の印象になる。是が主語明示文の欠点だ。いや、公務の場面によっては、源氏殿が藤氏以外の勢力を意識したことは在ったかも知れない。しかし、こうした話題に於いて、光君が藤兄以外を意識したことは無いだろうし、其れを敢えて言わないほど其れは当然のことであり、そういう全体の雰囲気は主語省略文でしか表現できないと、改めて認識する。にも関わらず、やはり私は客観描写の分かり易さを選ぶ。所詮、言い換え文だし。 *「くもりなきよう」は<曇らずに見える様→よく分かる事情>で、それが「いかでか(どうして)」の反語表現で「あらむ(有り得ようか)」だから、通せば<よく分からなく成って当たり前>という文。多分、注釈では「曇り」を<身分の低い女の腹にすぐれた子は生まれないという喩え。>としてあるようだ。が、「まことなりけり」と経緯を確かめたに過ぎないこの時点に於いて、「すぐれた子」かどうかの判断を殿が下せる、下したとは思えないので、此处の「曇り」は<消息の不確かさ>と取るべきではないか、とも考えてみたが、やはり「底清く澄まぬ水」という言い方から受ける嘲笑気味の語感からして、「まことなりけり」に経緯の他に思わしくない事態の確認までが含まれていた、と読むべきものらしい。つまり殿は「いかで聞きしことぞや」と、さも不案内のような言い方をしていたが、実は既に相当に詳しい事情まで聞き及んでいたのだろう。

と、*ほほ笑みてのたまふ。*中将の君も、詳しく聞きたまふことなれば(詳しくお聞きになっていたことなので)、えしもまめだたず(少将が家の恥とまで言っても、少しも真に受けません)。少将と*藤侍従とは、いと*からしと思ひたり(ひどく肩身が狭く思っていました)。 *この「ほほえみ」は揶揄を込めた皮肉っぽいものだったのだろう。自分が姫との結婚を阻まれて藤殿に恨みがあるという事情も、内大臣家の困りごとを愉快がるように作用したかも知れない。 *「中将君」が殿の情報源だったことが知れる文だが、それはこの場の誰もが分かっていた事らしい。また、この「詳しく聞きたまふ」は少将の「詳しくさまはえ知りはず」という言い訳が口濁しだったことを明示する。そして、いくら少将が浮かない表情で話して、仮に藤原殿が隠し子に手を焼いているようなことがあったとして、実は<詳しい事情>として深刻な事態でないことを中将君は知っているから<真に受けない>のだろう。ただし、読者は<藤殿が隠し子に手を焼いている>ような具体的な事柄を何も知らされて居らず、「蛍」第三章第五段での藤原殿の夢見がその後、何か<思わしくない事態>に発展したらし

いと思わされているだけだ。こういうのを、思わせぶりの書き方、と言うんじゃないだろうか。*「藤侍従(とうじじゅう)」は注が無い。藤原殿の三男だろうか。「侍従」は<帝の側近>なのだろうが、<中務省に所属する官人>と古語辞典にある。中務省は宮中の事務と警護を司る役所のように、となると弁官と近衛を兼ねたような印象だが、よく分からない。弁官は書記という文官だから実質で予算権限を持って物と人を動かせる。近衛は組織動員力を持って実力で秩序維持を担う。突き詰めれば非常時は権威と権限は警察や軍に体现されるので、近衛が上位なのだろう。しかし、秩序維持は手段であり目的は社会の繁栄なので、日常実務上の権限は弁官が発揮する。要するに両輪だ。この時代は官職の世襲化が進み、側近政治が固定化して、蔵人の実権が増したらしい。その視点で見れば、頭中將、頭の弁、に次ぐ地位が「侍従」だったのかも知れない。少なくとも、この文からはそう見える。*「からし」は<つらい、ひどい、危ない>などの他に<面白くない、立場が悪い、劣勢だ>などもある。此处では<家の恥>を曝して<面目ない>思いだった、かと思う。やはり随分思わせぶりの書き方だ。が、当時の人が普通に読み進むには、普通に興味をそそられる書き方なのだろう。

「朝臣や(息子や)、さやうの落葉をだに拾へ(そうした落ち葉でも拾ったらどうだ)。*人悪ろき名の後の世に残らむよりは(人聞きの悪い失格者の汚名が後世に残るよりは)、同じ*かざしにて慰めむに(落葉でも同じ木のものだからと納得して)、*なでふことかあらむ(何の不都合があろうか)」 *「ひとわるきな」とは、中將君が幼馴染みの藤原姫との婚姻を藤原殿に許されていないことを指しているらしい。だから<人聞きの悪い失格者という汚名>と言い換える。*「かざし」は「髪挿し」で<花や枝を折って髪や冠などに挿して飾ること>と古語辞典にある。だから、「同じかざし」は<同じ木の花や枝>を意味する。同様に「落葉」とあるのも<同じ木から落ちた葉>であり、<同じかざし→同じ幹の枝→同じ家の娘>という意味合いに成りそうだ。*「なじょう」は<「何といふ」の約>と古語辞典にある。「なでふことかあらむ」は成句のようなもので<何ほどのことがあろうか→たいしたことはない→差し支えない→何の不都合も無い>ということ、らしい。

と(と殿は)、弄じたまふやうなり(ふざけたように仰いました)。かやうのことにてぞ(こうしたことに関しては)、うはべはいとよき御仲の(うわべはとても良い御仲の殿と大臣には)、昔よりさすがに隙ありける(昔からやはり心の隙間があったのです)。まいて(それが昂じて)、中將をいたくはしたなめて(このように、中將君をひどく傷つけるようなことまでして)、わびさせたまふつらさを思しあまりて(哀しませる無神経も省みず)、「なまねたしとも(私が今言った言葉を、小憎らしいとでも)、漏り聞きたまへかし(少將から聞いて、思えば良いのだ)」と思すなりけり(と殿はお思いになったのです)。

かく聞きたまふにつけても(また殿は、この話をお聞きになるにつけても)、

「対の姫君を見せたらむ時(大臣に対の姫のことを知らせた時は)、また(その新たに見つかった娘と同じように)あなづらはしからぬ方に(あなどってしまいがちなように)もてなされなむはや(扱われるだろうか、いやとてもそうは思えない)。いともきらきらしく(何でも際立たせて)、かひあるところつきたまへる人にて(物の特徴を決め付けなざる人なので)、善し悪しきけぢめも、けぎやかにもてはやし(はっきりと誉めたり)、またもて消ち軽むることも(または貶すことに於いても)、人に異なる大臣なれば(人一倍の大臣なので)、いかにもものしと思ふらむ(その話の娘に、いかに不満を覚えたことだろう)。おぼえぬさまにて(此处で不意に)、この君をさし出でたらむに(この対の姫をもう一人の娘として差し出したなら)、え*軽くは思さじ(前の娘より、決して劣るとはお思いにならないだろうし、よもや姫を尻軽女とも思いなざるまい)。いと*きびしくもて

なしてむ(此処はよほど厳しく気を引き締めて、情交など存まじく処遇することにしよう)など思す(などとお考えになります)。*「かろし」は<軽々しい>で、「軽くは思さじ」は<軽々しくはお思いにならないだろう>となる。これは、前の娘を「ものし」と思うことに対して、それと比較すれば決して<見劣りはしない>という意味かと思う。ところで、「かろがろし」は<値打ちが無い、軽薄だ、浮いた噂になる>と古語辞典にあり、「え軽くは思さじ」には<よもや尻軽女とは思まい>といった殿の思惑があるに違いない。が、それは複意だ。文脈での表意は<前の娘に劣るまい>であり、その言い方で複意できるところが歌人らしい文、ということなのだろう。しかし、私は歌人らしい趣きなどは省みずに複意まで明示する。所詮、言い換えだ。*「きびし」は「厳し・緊し」とあり<嚴重に、厳然と、緩みが無い、密に>と説明される。だから、「きびしくもてなしてむ」は一般的には<厳しく律しよう＝此処は気を引き締めて掛からないと>となる。が、この「かろし」と「きびし」の語用で当時の読者が<この際は情欲を断ち切って姫を自分の勢力下から手放し、藤原殿の勢力下の娘として差し出そう、と源氏殿が思った>と理解したことは間違い無い。と考えて、其処まで言い換える。源氏殿は藤原殿に対して、できれば恩人の立場に立ちたい、のだろう。

[第三段 源氏、玉鬘を訪う]

夕つけゆく風(夕方になると風が)、いと涼しくて(だいぶ涼しくなって)、帰り憂く若き人びとは思ひたり(帰るのも気が進まない若者たちは思っていました)。

「心やすくうち休み涼まむや(皆は気兼ねなく寛いで涼んで行けば良い)。やうやうかやうの中に(どうもこうした若者の中では)、厭はれぬべき齢にもなりにけりや(私は煙たがれる歳になってしまったようだ)」

とて、西の対に渡りたまへば(殿が西の対にお渡りになるので)、*君達(中将君と藤原家のご兄弟は)、皆*御送りに参りたまふ(皆お供を許されて御同行なさいます)。*「きんだち」は、中将君の「親しき殿上人」である「若き人びと」ではなく、「例の大殿の君達」で少将と侍従の二人を指す、のだろう。*「おんおくり」に付いては下文からの逆推になるが、これは君達が自主的に殿を御送りしたのではなく、対の姫目当てに君達が殿に御伴を願い出て、それを殿に許されたものようだ。

たそかれ時のおぼおぼしきに(黄昏時の暗がりに)、同じ直衣どもなれば(みな身内の軽装で)、*何ともわきまへられぬに(前庭の君達が、誰とも見分けられないので)、大臣(室内の殿は)、姫君を(姫君に)、*「なにともわきまへられぬ」は<誰とも見分けられない>だが、問題は各々の位置関係だ。これも下文の先読みだが、君達は前庭に居る。姫は西の対の母屋に居るのだろう。殿も姫の側に居るのだろうが、母屋なのか廂なのかは分からない。夏の夕方だから藪格子は跳ね上げられて開いたままだったろうし、妻戸も開け放たれていたかもしれない。それでも御簾は下げてあったのだろう。大体が、春の町の東釣殿から夏の町の西の対まで何処を通過して来たのだろうか。内廊下を通るにしても、釣殿から一旦は外に出ることになる。それから直ぐ中門から建物内に上がって廊下を通ったかも知れないし、夏のことだから外のまま、例えば馬場近くを北へ回るとかし、夏の町へ行ったのかもしれない。事細かくなくても何か書いてあっても良さそうなものを、そのことが全く触れられていないのは意外だ。だから詳しい事など分かる筈もないが、先読みなどから分かる範囲で補語する。でないと、まともな文にならない。

「すこし(もう少し)*外(と、外へ)出でたまへ(お出なさい)」 *「外」は母屋から廂へ、ということなのだろう。建物で見れば、屋根のある室内は母屋の周りの廂から奥で、外は縁側だろうが、姫は男の目がある時に御簾の外へは出ない筈だ。

とて、*忍びて(近付いて)、 *「しのびて」は訳文にあるように<こっそりと>かとは思ふ。しかし、この場面での人物配置描写がないために、そもどのような形で二人が居るのが分からない。で、<こっそりと>話すためには相当に<近付いた>に違いないと思う。

「少将、侍従など率てまうで来たり(藤原の少将と侍従を連れて来ました)。いと翔けり来まほしげに思へるを(彼らは此処に飛んで来たいと思っていたのを)、中将の(息子のヤツが)、いと実法の人にて率て来ぬ(真面目一方で今まで連れて来ませんでした)、*無心なめりかし(気が利かないことですよ)。 *「むじん」は<気が利かない>を軽口風にいう言い方、らしい。

この人びとは(彼らは)、皆思ふ心なきならじ(皆あなたに気の無い者は居ません)。なほなほしき際をだに(普通の女でも)、窓の内なるほどは(深窓に隠れている内は)、ほどに従ひて(その家柄なりに)、ゆかしく思ふべかめるわざなれば(男は理想像を思い描くものなので)、この家のおぼえ(当家の評判は)、うちうちのくたきほどよりは(内々のこまごました遣り繰りの割に)、いと世に過ぎて(世間並みをはるかに超えて)、ことごとしくなむ言ひ思ひなすべかめる(とても素晴らしいものだと言ひ思ひ込んでもいるところに、)。かたがたものすめれど(何人かは姫君も居るのだが)、さすがに人の好きごと言ひ寄らむにつきなしかし(幼君や中宮はさすがに男が言ひ寄るには相応しく無いし、)。かくてもものしたまふは(あなたがこうしていらっしゃることで、いかで*さやうならむ人のけしきの(何とかそうした恋に駆られた男たちの反応の)、深さ浅さをも見むなど(深さや浅さを見たいと)、*さうざうしきままに願ひ思ひしを(非常に興味深くそう出来たらと思っていたので)、本意なむ叶ふ心地しける(今その願いが叶う気分です)」 *「さやうならむ人」とは、女を「ゆかしく思ふべかめる」男たちなのだろう。その男たちの好色ぶりを見てみたい、と殿は言っているワケだ。尤も、「好色」とは広い意味での人間模様であり、人が和して大きな力を得る為の文化とも言えるだろうが、下品な好奇心を少なからず含むし、それだけに面白く重要な情報だ。ただ藤原家の兄弟は、実は姫の腹違いの弟たちであり、その事情を百も承知の筈の殿のこの言い方は、歪んだ性根も感じさせる。いやしかし、殿は「いとさびしくもてなしてむ」と腹を括った筈だ。つまり殿は、姫を自分の女とすることは諦めて、少なくとも表向きはその体裁を保って、偶々知り合ったという建前の姫を馴れない藤原家に引き合わせる機会を待っていた、という筋書きで藤原殿に紹介する、という方針を立てたのだ。だからもし、その読み方が正しいとすれば、これは最後の足掻きに違いない。どうなのだろう、注目だ。 *「さうざうしきまま」は訳文に<退屈なあまり>とある。「さうざうし」は<あるべきものがなくて心が満たされない。もの足りない。さびしい感じである。>と大辞泉にある。欠乏感、を思わせる語感だ。だから<落ち着かない>とか<飽き足らない、不満だ>ということにはなるかと思うが、<退屈>は馴染まない気がする。まして「願ひ」とあり、「本意なむ叶ふ」とあれば、相当な渴望感だ。いや冗談だとしても、其処まで大袈裟に言っただけの面白さだろうから、やはり<非常に欲した>と読みたい。

など、ささめきつつ聞こえたまふ(ささやくように申しなさいませう)。

御前に(西の対の前庭には)、乱れがはしき(多種類の)前栽(せんざい、草花)なども植ゑさせたまはず(殿は植えさせなさらず)、撫子の色をととのへたる(撫子一色に揃えて)、唐の(カラナデ

シコや)、大和の(ヤマトナデシコが)、籬(ませ、編み竹の低い囲いを)いとなつかしく結びなして(とても優しい形に結び組んである中に)、咲き乱れたる夕ばえ(花開いた夕映えは)、いみじく見ゆ(見事でした)。*皆(貴公子たちは皆)、立ち寄りて(その花の近くに立ち寄って)、心のままにも*折り取らぬを(美しい花を折り取るようには思うように物に出来ない姫を)、飽かず思ひつつ*やすらふ(相変わらず思い続けて手を拱いています)。*「みな」が庭を散策していたことが明示された。*「をりとらぬ」に付いては、注に<主語は少将や侍従たち。「折り取らぬ」は不可能の意を表す。『集成』は「撫子を玉鬘に見立て、思うままにわがものとはできないのをくやしく思っていることを暗示する」と注す。>とある。従う。*「やすらふ」は<休む、立ち止まる>だが、安心して落ち着いているのではなく、手詰まりで途方に暮れているワケで、否応なく休止しているのだ。

「*有職どもなりな(有能な者たちだ)。心もちみなども(気配りなども)、とりどりにつけてこそめやすけれ(行き届いていて感心します)。*「いうそく」は<識者、学者、典礼の式次第を知る者、行儀作法を知る者、達人、教養人>などを言うようだ。が、この場合のような一般的な言い方をされると何を言っているのか分からない。一般的で且つある程度具体的な意味なら<行儀が良い>くらいは言えそうだが、「行儀が良い」は<大人しい>に通じる語感で、恋する者を評するに相応しい気がしない。尤も、姫から見れば恋の対象者ではなくて腹違いの弟たちな訳だが、殿の説意ではあくまでも恋する者たちだ。だから具体性は諦めて、この際は能動性が感じられる<有能>にして置く。

右の中将は、ましてすこし静まりて(もう少し落ち着いていて)、心恥づかしき気まさりたり(此方が気が引けるほどの気遣いぶりです)。いかにぞや(どうですか)、おとづれ聞こゆや(手紙は寄越していますか)。*はしたなくも(無作法にも)、なさし放ちたまひそ(決して無視したり為さいませんように)」*「はしたなし」は<行儀が悪い>の他に<無愛想だ、素っ気無い、つれない>ともある。「さし放つ」は<捨て置く、顧みない>の他に<遠ざける>。なので、「はしたなくも、なさし放ちたまひそ」は<冷たく突き放さないで、気を待たせなさい>とも解せる。しかし、右中将は姫の異腹弟である。姫の藤原家の自覚からしても、恋愛対象と見るのは不可能だ。だから<気を持たせろ>みたいな言い方は無茶振りが過ぎて成立させにくい。尤も、源氏殿は今までに結構無茶振りをして来ているので、そういう素っ頓狂な言い方をしないと限らないが、それは理屈を捏ねる言い換えの限界を超える。

などのたまふ(などと殿は仰います)。

中将の君は、かくよきなかに(この公達の中にあつて)、すぐれてをかしげになまめきたまへり(最も目立って優美でいらっしやいました)。

「中将を厭ひたまふこそ(この中将をお嫌いなさるとは)、大臣は*本意なけれ(大臣はどうかしている)。*交じりものなく(藤原一門で)、きらきらしかめるなかに(華やごうという中に)、大君だつ筋にて(息子が地味な王家筋なので)、かたくななりとにや(気に入らないのですかね)」*「ほいなし」は<残念だ、なってない、気に入らない、情けない>で、対象者の意向や行動ではなく、話者の判断なので敬語にならない語のようだし、いかにも軽口の語感だ。ところで「本意」については、先にも軽口で「本意なむ叶ふ心地しける」とあつたばかりだ。何か「本意」には軽口で使われるような意味合いが、本来かその当時にあつたのだろうか。何となく気になる。*「まじりものなく」は<純血で>だろうか。この文は冗談なので言い回しこそが命であり、歌同様に本来は言い換えが無効で、理詰めに分は無いが、それを言っちゃあお終いなので、やはり理屈を捏

ねて、言い換えを試みる。さて、藤原氏は天皇家との縁結びで実権を得たのであり、元々有力な豪族であれば、それ自体が王族の一つであり、繁栄を支えたという事では天皇家の実体とも見做せるかも知れない。第一、藤原殿の母は大宮であり、源氏殿の父たる桐壺帝の妹君という血縁である。だから、この文は「きらきらし」を頼りに「派手な華やぎ」と解して、「おほきみだつ」を「地味な王家」として対比させる文理にした。

とのたまへば(と殿が姫に仰ると)、

「*来まさば(謡曲では「皇子がいらしたら婿に迎える」)、といふ人もはべりけるを(と言う人もあったようですが)」 *「来まさば」は注に「玉鬘の詞。源氏の「大君だつ」を受けて、催馬楽「我家」の「大君来ませ、婿にせむ」を踏まえて応える。『集成』「夕霧の方から事を進めれば、内大臣も喜んで婿として迎えるだろうにと、内大臣をとりなしていう」と注す。>とある。催馬楽「我家」は既に何度か引き合いに出されているが、歌は「我家は(わいへは)帷帳も(とぼりちゃうも、寝台も)垂れたるを(たれたるを、用意してあるので)大君来ませ(おほきみきませ、皇子がいらしたら)簀にせむ(むこにせん、婿に迎えよう)御肴に(みさかなに、ご馳走は)何よけむ(なによけん、何が良いだろう)鮑さだをか(あはびさだをか、アワビやサザエか)石陰子よけむ(かせよけん、ウニが良いだろう)鮑さだをか(あはびさだをか)石陰子よけむ(かせよけん)>と出典参照にある。いかにも、婚礼祝言の祝い歌だ。これを「内大臣をとりなしていう」とも取れるかとは思いますが、殿に同調するとか、中将に同情するとかの取り方も出来そうだ。それらを含めて「場を穏やかに」とりなそうとして答えた、のかも知れない。

と聞こえたまふ(と姫は答えをさいます)。

「いで(いや)、その御肴もてはやされむさまは願はしからず(そんなご馳走を振舞われることは望んでいません)。ただ、幼きどちの結びおきけむ心も解けず(幼い者同士が共に願った思いが適わず)、年月(長年)、隔てたまふ心むけのつらきなり(二人を隔て為さっている大臣の御意向が辛いのです)。まだ下臈なり(息子がまだ下級役人で)、世の聞き耳軽しと思はれば(婿に迎えるのは外聞が悪いとお思いなら)、知らず顔にて(当面の表向きは、知らぬ顔をして)、ここに任せたまへらむに(二の姫を当家にお預け頂くのに)、うしろめたくはありなましや(何の心配がありません)や)」

など(などと殿は)、うめきたまふ(嘆息なさいます)。

「さは(そうか)、かかる御心の隔てある御仲なりけり(このように殿と実父とは御心にわだかまりがある御仲だったのか)」と聞きたまふにも(と姫は殿の言葉をお聞きなされるにも)、親に知られたてまつらむことのいつとなきは(実父に自分の事を知って頂くのが何時になるかと)、あはれにいぶせく思す(しみじみ悲観なさいます)。

[第四段 源氏、玉鬘と和琴について語る]

*月もなきころなれば(五月末の月も無い宵闇なので)、燈籠(とうろ、室内の明かり台)に御殿油参れり(に火を灯します)。 *「月」が見えないのは新月だろうし、端午の節句の話題の後なら旧暦の六月一日で、水無月(みなづき)となる。しかし、月齢25日以降は24時過ぎの今で言う翌日に月の出があり、宵の内には月が無い。そして、遅くに出た月も月影は細いし、有明どころか夕方近くに入りとなって、明かりとしては頼り無い。だから、「月もなきころ」の言い方にはこの月末の方が合いそうだ。この場面は旧暦の五月末、今の季節感なら

新暦の六月末の梅雨明け頃、と読む。また、こうした情景描写は場面転換を示すが、上文との時間経過は然程無さそうで、であれば、君達が退けて行く様子が触れられている方が今日的な分かり易い文に思えて、詰まりは少しその辺の流れの雰囲気分からないまま、話が進んでしまう違和感がある。

「なほ(室内灯はやはり)、気近くて暑かほしや(火が近くて暑いな)。篝火こそよけれ(かがり火の方が良さそうだ)」

とて、人召して(係りの者を呼んで)、

「篝火の台一つ、こなたに」と召す(と用意させます)。

をかしげなる*和琴のある(面白そうな六弦琴が部屋に置いてあったのを)、引き寄せたまひて(引き寄せなさって)、掻き鳴らしたまへば(爪弾きなさると)、*律にいとよく調べられたり(長調によく調弦されていました)。音もいとよく鳴れば、すこし弾きたまひて、 *「和琴(わごん)」は<日本の弦楽器の一。神楽・東遊(あずまあそ)びなど、雅楽の日本古来の歌舞に用いる6弦の琴。>と大辞泉にある。*「律(りち・りつ)」は「呂(りよ、陰呂)」に対する調弦とされ、陽律ということらしい。この陰陽は、今の西洋音階の方がずっと近年の概念なので、その長調短調を意味する筈はないが、私が認識できる調律と言う意味で便宜上こう言い換える。

「かやうのことは御心に入らぬ筋にやと(音楽は御興味が無い方面かと)、月ごろ思ひおとしきこえけるかな(今までずっと思い込み申ししていました)。

秋の夜の月影*涼しきほど(この楽器は、中秋の名月のように月が美しく澄んで見えるところに)、いと*奥深くはあらで(そう技巧を凝らさずに)、虫の声に掻き鳴らし合はせたるほど(虫の声に流し弾きで合わせたりすると)、気近く*今めかしきものの音なり(気軽に風情を楽しめる音色です)。*ことことしき調べ(外国の込み入った曲だと)、もてなししどけなしや(演奏に締まりが無いかもしれせん)。 *「すずし」は<澄んでいる>。 *「おくぶかし」は<意味が深い>だろうか。此処での語用は分かり難い。下の「気近し(けちかし、気軽だ)」に繋がる一般的な意味を考えれば<あまり高尚ではない→専門的ではない→技巧を労しない>くらいだろうか。ギターのオープン・チューニングの開放弦弾きあたりをイメージしてみる。 *「いまめかし」は<当世風に華やかだ、新しく派手だ>などと古語辞典にある。しかし、およそ楽器と言うものは<今の気分を盛り上げる>道具であって、文字通り「今粧す」とも解せるので、和琴の特徴は「気近く」にあると取り、「今めかしきもの」は<今を彩る>という楽器一般の説明と取る。 *「ことことし」は<仰々しい、事改まった>などだが、何のことか分からない。ただ、「しらべ」は<曲>だから<仰々しい曲>と言えば、<大作>らしい感じは受ける。が、何を以って「大作」と言うのか、少しは具体的な説明が欲しい。そこでまた、下文の先読みだが、「広く異国のことを知らぬ女のため」とあるのに関連付けて捏ねた。

このものよ(この和琴というものは)、さながら(しかしながら)多くの遊び物の音(多くの楽器の合奏の)、*拍子を調べとりたるなむ(拍子を合わせるのに)いとかしこき(とても優れています)。*大和琴とはかなく見せて(日本固有の弦楽器だからと簡単な物のように見えて)、*際もなくしおきたることなり(万能な楽器に作られているのです)。広く異国のことを知らぬ女の*ためとなむおぼゆる(広い外国の知識を持たない女には便利な楽器のように思えます)。 *「はうしをととのふ」は<指揮を執る>とも読めそうだが、中身が分からない文だ。ただ、琴柱で調律する「琴」という楽器は、曲の調子

ごとに音階を固定する演奏方法を取るのも、大雑把に言えば和音楽器だ。が、十三弦のような大型楽器は単音弾きで、その倍音の響きの音色を楽しむ傾向が強い。それに引き換え六弦なら、コード弾きないし分散和音のようなリズム楽器として曲全体を方向付ける、と言った働きが出来たのかも知れない。そんな風に理解する。*「やまごと」は「はかなし(頼り無い、ちゃんと作られていない)」と語られる。注には<『完訳』は「このあたり、渡来の文物の優秀さを前提にしながらも、日本古来の捨てがたい価値を称揚。和琴をその典型とする」と注す。一般に唐来物を最上、高麗物を次善とし、国産のものは低く見ている。>とある。理詰めでは劣るが、総合感性による事物の完成度では特異性を有する。みたいな主張だ。何だか、明治維新の西洋追随批判に似る。が、中国は大陸の陸路と海路を通じて古代以来常に西に開かれ続けていた。この時点で中国を知っていたことは、日本にとって対西洋列強の根本的な生命線を既に有していた、とは言えるのかも知れない。この島国に、人類としての知覚が地球を認識する時点で、独自文化を持つ一定の集団の人間が居たこと、は意味の詮索はともかくも、他の諸国がそうであると同じように事実ではありそうだ。それが世界史であり、人類史だろうか。*「きはなし」は<限りなし>で<それと認識できる特徴が無い>か<万能>か、だ。「仕置く」は<作ってある>。*「ため」は、ある対象に資することを目して<用意または作られた物事>を示す場合もあるだろうが、和琴が女専用の楽器である筈もないので、此处は<特に女の役に立つ>、という文意だろう。

同じくは(どうせ演奏するなら)、心とどめて(そのことを考えて)物などに掻き合はせて習ひたまへ(他の楽器と合奏して練習なされませ)。深き心とて(難しい演奏方法はこれと行って)、何ばかりもあらずながら(特には無いものの)、また*まことに弾き得ることはかたきにやあらむ(しかし本当に思うように弾くというのは、多くの楽器や曲の解釈を知っているということなので、難しいのかも知れませぬ。)、ただ今は(今ですと)、この内大臣にならずらふ人なしかし(あの内大臣に並ぶ演奏者は居ないでしょう)。*「まことにひきうる」は上の「多くの遊び物の音拍子を調へとりたる」が出来ること、と解す。ところで、この演奏方法の説明はリズム・ギターの説明と実によく似ている。ギターのコード弾きは、左手でコードの指盤の形を覚えれば、右手は拍子を取って六弦を順に弾き下ろすか逆順に引き上げて演奏するので、基本的にはあまり細かな技巧は無い。が、曲の解釈や全体の構成把握が出来ていなければ、部分的な技巧を詰めることに意味が無い。というか、どう弾いていいか分からない、弾けない、のである。しかし、曲を理解している者のリズム・ギターは他の全ての演奏者に曲の方向性を示すし、曲そのもの、でさえある。ということを下文も言っている、かと思う。

ただはかなき同じ*菅搔きの音に(何気なく繰り返す流し弾きの音に)、よろづのものの音(他の全ての楽器の音が)、籠もり通ひて(包まれて共鳴して)、いふかたもなくこそ(言いようも無い一体感で)、響きのぼれ(曲が響き立つものです)」

と語りたまへば(と殿がお話なさると)、ほのぼの心得て(姫は実父に会う手掛かりを少し得たような気がして)、いかでと思すことなれば(ぜひ会いたいとお思いのことなので)、いとどいぶかしくて(どうしたら会えるかが知りたくて)、

「このわたりにて(此方のお邸で)、さりぬべき御遊びの折など(何かの音楽会の折に)、聞きはべりなむや(内大臣の和琴をお聞き出来るでしょうか)。あやしき山賤などのなかにも(京の雅など覚束無い田舎者の中にも)、まねぶものあまはべるることなれば(演奏する者が多く居ります和琴のことなので)、おしなべて心やすくやとこそ思ひたまへつれ(普通に気軽に弾ける楽器と

ばかり思っていました)。さは(そのように)、すぐれたるは(優れた演奏は)、さまことにやはべらむ(さぞ違うのでしょうか)」

と、ゆかしげに(興味深そうに)、切に心に入れて思ひたまへれば(熱心にお尋ね為さると)、

「さかし(そうですとも)。あづまとぞ名も立ち下りたるやうなれど(和琴は別名を東琴とも言つて田舎じみたようですが)、御前の(ごぜんの、帝の御前の)御遊びにも(公式な音楽会でも)、まづ*書司を召すは(第一席に和琴をお引き立て為さるのは)、人の国は知らず(外国では違つても)、ここにはこれをものの*親としたるにこそあめれ(この国ではこれを楽器の親と位置付けているからこそに違いありません)。 *書司(ふみのつかさ・ふんのつかさ)は<後宮十二司の一つ。後宮の書籍・楽器などの維持管理を行う部署。また、司る女官。>と古語辞典にある。が、それ自体で<和琴の異称。>ともある。それほど、後宮に於いては主たる楽器だった、のかも知れない。 *親は<大元>ないし<最重要物>くらいの意味合いかとは思ふが、此処では源氏殿が藤原殿を「親」と意識したことを示す作者の語用と取つて、その言葉はそのまま言い換える。

そのなかにも(その演奏者の中でも)、親としつべき(親と言うべき第一人者のあなたの実父たる)御手より(みてより、内大臣の御演奏から)弾き取りたまへらむは(弾き方をお知りになろうというのは)、心ことなりなむかし(格別なものでしょう)。ここになども(この家にも)、さるべからむ折にはものしたまひなむを(大臣は何かの演奏会の折にはお見えになるでしょうが)、この琴に(この和琴の)、手惜しまずなど(奏法を惜しまずに)、あきらかに掻き鳴らしたまはむことやかたからむ(分かり易く演奏なすることは無いでしょう)。ものの上手は(名人と言うものは)、いづれの道も心やすからずのみぞあめる(どういう事柄にしても簡単に技を明かさないものです)。さりとも(それでも、あなたなら)、つひには*聞きたまひてむかし(いつかはお知りになることでしょう)」 *聞くは<聞き知る>でもある。此処では勿論、姫が内大臣の和琴奏法を会得する、という言い方ではある。が、源氏殿の独り言としては、藤原殿が姫のことを知ることになる、という決意でもあるだろう。そして、それを姫が感じ取っただろう、と読者に思わせようとする書き方、ではありそうだ。

とて(と答えて)、調べすこし弾きたまふ(殿は曲を少しお弾きになります)。*ことつひいと二なく(拍子の取り方が実に素晴らしく)、今めかしくをかし(楽しくて風情があります)。 *「ことつひ」は語義未詳。『集成』は「和琴を弾く姿とも、琴さき(爪)ともいう」。『完訳』は「演奏する姿の意か」と注す。と注にある。「二無し」は<二つとなく素晴らしい>で、「今めかし」が<楽しい>で「をかし」は<情緒がある>だから、「弾きたまふ」を受けた話題としては「音色」か「演奏の仕方や腕前」だろうか。「琴遣ひ(琴を引く指遣い)」に「事遣ひ(演奏の出来栄え)」を掛けた言葉、などと考えるのも楽しい。マ、どうせ未詳なのだから、源氏殿の和琴論に則つて言い換えて置く。

「これにもまされる音や出づらむ(これ以上の音が出るのだろうか)」と、親の御ゆかしさたち添ひて(親恋しさも加わつて)、このことにてさへ(殿の琴の音に付けてさえ)、「いかならむ世に(いつになったら)、さてうちとけ弾きたまはむを聞かむ(このように親しく実の父親が和琴をお弾きになるのを聞けるのだろうか)」など、思ひあたまへり(姫は考えていらっしやいました)。

「*貫河の瀬々のやはらた」と(と殿は催馬楽の一節を)、いとなつかしく謡ひたまふ(実に懐かしんで謡いなさいます)。「親避くるつま」は、すこしうち笑ひつつ(少し苦笑い為さりながらですが)、わざともなく搔きなしたまひたる菅搔きのほど(特に変わった技巧も無しにお弾きなさる殿の弾き語りか)、いひ知らずおもしろく聞こゆ(何とも言えず味わい深く聞こえます)。*「貫河」はく催馬楽「貫河」の歌詞の一節。>と注にある。催馬楽「貫河」は「花宴」第一章第四段でも使われていたが、その時は葵上への当て付けだった。歌の文句はく貫河の瀬々の(ぬきかはのせぜの)柔ら手枕(やはらたまくら)柔らかかに(やはらかに)寝る夜はなくて(ぬるよはなくて)親離くる夫(おやさくるつま)親放くる夫は(おやさくるつまは)増して愛し(ましてるはし)然か然らば(しかさらば)矢矧の市に(やはぎのいちに)杳買ひにかむ(くつかひにいかん)杳買はば(くつかはば)線鞋の(せんがいの)細敷を買へ(ほそしきをかへ)さし履きて(さしはきて)表裳とり着て(うはもとりきて)宮路通はむ(みやちかよはん)>と、出典参照から類推する。と言っても、分かり易い解説は手元に見当たらないので、大雑把な解説だ。「柔ら手枕」は「新手枕(にひたまくら、初夜)」の連想で<新婚夫婦>。「親離くる夫」は<親元を離れた夫>。「親放くる夫」は<親に夫婦仲を裂かれた妻←親元を離れられない妻>。で、その妻が市場に靴を買いに行く、その足で京にいる夫に会いに行く、という筋。「貫河」は、今の岐阜県本巢市(もとすし)、かつての美濃国席田郡(むしろだのこほり)に在った糸貫川(いとぬきがわ)と目され、今の根尾川から長良川へ向かうような糸貫川あたりのこと、らしい。「糸貫川」に関して、Webサイト「よみがえれ糸貫川」アップロードに<新羅人を中心に立てられた席田郡は彼らの故郷の生活習慣によって、異国情緒の漂う郡となった。827年に美濃国司に任じられた藤原高房の善政が文徳実録仁寿に記されている。>という面白い記事があった。尤も、「貫河」は<抜き出て秀でた川>という一般的な印象で「瀬々のやはら(さらさらと美しい)」を導く歌枕だったとすれば、必ずしも席田郡に因縁付くものではないのかも知れない。矢作の市も愛知県岡崎市矢作町に立ったとすれば、岐阜市の方が京に近いので、此方も定かでは無い、らしい。が、何れにせよ、靴を買いに行くのに託けて京に行こうという筋は確かだろうし、「おやさくるつま」が<親と別れた人>と<親に仲を裂かれる人>を意味するのもほぼ確からしい。だから、源氏殿としては「貫河」の歌筋を姫に重ねて<母親と死別した姫は和琴を聞くことに託けて父親の藤原殿に会いに行こうとする、まるで私が仲を裂く邪魔者のように＝ならば、私は諦めよう>という決意を滲ませた苦笑いで「親避くるつま」の一節を謡った。その自嘲が「すこしうち笑ひつつ」の意味、かと思う。したがって、前後するが「なつかしく」は<新妻とも言うべき対の姫を諦める心算で、その柔肌をしみじみと懐かしんだ>のだろう。源氏殿が女を諦めるといふ非常に特異な場面ながら、その照らいを催馬楽の遊び心で紛らわすという、実は普通の人には良く在りがちな照れ隠しの方法だ。さすがに姫も、殿の暗意には気付いただろうが、それがどのくらいの現実性があるのかは量りかねていたのではないだろうか。その辺が、何とも「おもしろく聞こゆ」なのだろう。

「*いで(さあ)、弾きたまへ(お弾きなさい)。才(ざえ、芸事)は人になむ恥ぢぬ(は人前を恥じないものです)。「*想夫恋」ばかりこそ、心のうちに思ひて(心中に秘めて)、紛らはず人もありけめ(弾かない人もいるようだが)、*おもなくて(遠慮無しに)、かれこれに合はせつるなむよき(いろいろな曲に合わせてみれば良いのです)」 *「いで弾きたまへ」は印象的な台詞だ。勿論、和琴を「お弾きなさい」ではあるが、今後は「本心を隠さず、藤原殿に会いたいと言っても良いんだよ」という語感だ。「想夫恋」の「夫」は姫にとって<藤原殿>に他ならない。 *「想夫恋(そうふれん)」は<雅楽の一。左方の新楽で、平調(ひょうじょう)の中曲。晋(しん)の大臣王儉が一時失脚し、清廉(せいれん)であることがわかって重任されたのを、泥中の蓮(はす)の花にたとえて作ったという。舞はない。小督局(こごうのつぼね)が演奏して天皇の愛情をしのんだ平家物語中の話で有名。>と大辞林にある。 *「おもなし」は「面無し」で<面目ない、恥ずかしい>という意味と、<遠慮が無い、あつかましい>という意味がある、と古語辞典にある。

と(と殿は)、切に聞こえたまへど(しきりにお勧め為さるが)、さる田舎の隈にて(あの田舎の片隅で)、ほのかに(それとなく)京人と(きょうひとと、都人と)名のりける(名乗っていた)、古大君女(ふるおほぎみをんな、王家筋の老女が)教へきこえければ(教え申したので)、*ひがことにもやとつつましくて(変な弾き方をしたら恥ずかしいと)、手触れたまはず(姫は手を出しなさいません)。*「僻事にもや」は<間違った弾き方でもしたら>だが、姫の意識としては<下手な真似をして殿の機嫌を損ねたくない>気持ちが働いた、のだろう。殿が内大臣への引き合わせを仄めかした折角の機会を失いたくない、という気持ちだ。

「しばしも弾きたまはなむ(もう少し弾いて見せてください)。聞き取ることもや(私にも弾き方が分かるかも知れません)」と心もとなきに(と姫は自信がないので)、この*御琴によりぞ(その琴の事のために)、*近くみざり寄りて(殿に近く膝寄せなさって)、*「おんこと」は<「事」と「琴」の掛詞。>と注にある。*「近く居座り寄りて」も殿の機嫌を取る態度なのだろう。

「*いかなる風の吹き添ひて、かくは響きはべるぞとよ」 *「いかなる風の」は<「琴の音に峯の松風かよふらしいづれの緒よりしらべそめけむ」(拾遺集雑上、四五一、斎宮女御)を踏まえる。>と注にある。しかし、「いかなる風の吹き添ひて(どういう風の吹き回しで、今日はそんな殊勝なことを言いなさいますやら)」などという言い回しは、「しばしも弾きたまはなむ。聞き取ることもや」と可愛らしく擦り寄った姫の言葉とは、とても思えない態とらしさだが、はなしのオチをつけるためには、どうしても姫にこう言わさなければならない枕、ということ、この引歌こそを持ち出すこと自体が目的の言い回しだったようだ。引歌は「いづれのを」の「を」が、山の稜線である尾根の「尾」と琴の絹糸の「緒」とに掛かることから、「通ふ(似ている、と、交じる、の複意)」と洒落て情感を持たせたもの、なのだろう。松は長寿を祝うめでたい木だが、松風はその松を揺らす程の強風だろうか。厳しさを感じる。力強さかも知れないが、山風には激しさや寂しさも感じる。

とて、うち傾き(うちかたぶき、耳を傾け)たまへるさま(為さる姫の姿は)、火影に(ほかげに、かがり火に)いとうつくしげなり(とても美しく映えました)。笑ひたまひて(殿は微笑なさって)、

「*耳固からぬ人のためには(そんなに耳を片向けなくても聞こえる耳の良い人なら)、身にしむ風も吹き添ふかし(風情どころか、身に沁む冷たい山風まで吹き聞こえるでしょうよ)」 *「みみかたし」は<耳が遠い>と大辞泉にある。が、それなら「耳難し」の方が合いそうだ。が、何れにしても漢字表記が後付だとすれば、語意はむしろ文意から探るしかないことになる。となると、この場面は姫が「うち傾きたまへる」ことに対しての殿の台詞だ。だから、「耳かたからぬ」を<「耳片かる(耳を片向ける)」「ず(ことなく、聞こえる)」>ということに掛けた洒落言葉、と見れば、「耳固からぬ」は<耳が遠くはない=耳が良い>という意味になりそうだ。「人のため」の「ため」は<(人に)利する>ではなく<(人の)事情、理由>で、「ために」は<~のせいで、~ならば>。ところで、此处が話のオチらしいので場面を整理してみる。殿は姫に、藤原殿との引き合わせを仄めかして、姫の反応を確かめようとした。姫は殿の申し出を嬉しく思うが、半信半疑で、もっとはっきりとその意向を確かめたいし、更にはその意向を確かなものにするために、殿の機嫌を取ろうとする。姫は「お上手ですね、もっと聞かせて下さい」と言って、殿に近付いては和琴に耳を傾ける。が、殿はその姫の態度に、姫が自分の演奏に興味があるのでは無く、自分の機嫌を取ると同時に、和琴の名手の内大臣に早く会わせて貰おうとする姫の魂胆を感じ取る。というわけで、姫との恋愛ごっこもそろそろ潮時かと観念した殿を尻目に、露骨に藤原殿への関心を見せ付ける姫に対して、いくら観念したと言っても、その可愛い姿に未練を感じて、少しは自分への情愛を見せて、実父への思い入れを遠慮しろ、と殿は思わずへそを曲げる、という所だろう。此处で殿が言う「身に沁む風」は<厳しさに身を詰ま

れる風←姫を諦める寂しい気持ち>だから、姫が持ち出した引歌の<琴の音に山越えの松風の音が風情を加える>の「山越えの松風」を<風情どころか辛く寒々しい>と皮肉って答え、少しは悲しい顔をしろ、と注文を付けたように見える。であれば、その皮肉が面白くなる言い回しは、やはり「耳が良いなら聞き分けられるだろう」という遠回しで良さそうだ。「吹き添ふ」は<吹く音まで聞こえる>の洒落た言い回し、なのだろう。ただ、「吹き添ふかし(吹き加わるだろう)」という言い方は、「察しが悪い者には罰が当たれば良い」という八つ当たり気味の語感にも見えて、そこまでの意を汲んでしまうと、「耳固からぬ」を<耳を傾けないで、聞き分けが無い>という解釈も出来てしまうのが、座りの悪い気がする。しかし、姫は「うち傾きたまへる」のだから、耳を<傾けていない>という言い方は成立しにくい、と考える置く。

とて、押しやりたまふ(琴を弾かずに押し遣りなさいます)。いと*心やまし(何とも気まずい雰囲気です)。 *「こころやまし」は<良心がとがめるさま。うしろめたい。>または<心が穏やかでない。いらだたしい。不愉快だ。>と大辞泉にある。そして注には<『集成』は「玉鬢の思いがそのまま地の文に重なる書き方」。『完訳』は「玉鬢の心情に即した地の文」と注す。>とある。しかし、「心が穏やかでない」または「心残り」なのは源氏殿も同じ、というか、殿の方が決意した分だけ気が重いだろう。だから、この場の地文としては<全体に収まりが悪い→何となく気まずい>くらい、かと思う。

[第五段 源氏、玉鬢と和歌を唱和]

人びと近くさぶらへば(女房たちが近くに控えていたので)、例の*戯れごともえ聞こえたまはで(いつもの睦み言もとても申しなされずに)、 *「たはぶれごと」は<冗談>ではない。「冗談」なら女房が居ても、いや、居た方が場が盛り上がり面白いだろう。「たはぶれ、たはむれ」は<ふざける、遊ぶ>だが、好色ごとで<いちゃつく>時にも使うことが多い。また、確かに日常に於いては「いちゃつくこと」を<冗談を言う>と言うこともあるが、このような紛らわしい場面での言い換えには、出来るだけ取り違えの少ない言い方を心掛けるべきだろう。さらに「え」は「得」とあり、可能・不可能を示す副詞と古語辞典に説明されていて、この文は<言わない>のではなく<言えない>のだから、女房の目とは即ち世間体を気にしているわけで、やはりただの<冗談>であろう筈はなく<口説き文句>か<睦言>だ。

「*撫子を飽かでも(撫子を十分に見もしないで)、この人びとの立ち去りぬるかな(あの若者たちは立ち去ってしまったのだな)。いかで(何とか)、大臣にも、この花園見せたてまつらむ(この花園を見ていただく)。世もいと常なきをと思ふに(世の中は常に変わり続けるものだとは思いますが)、いにしへも(遠い昔の)、ものついでに*語り出でたまへりしも(ものついでにあなたのことを大臣がお話し出された時の事が)、ただ今のこととぞおぼゆる(つい今さっきのことに思われます)」 *「撫子を飽かでも」の訳文は<撫子を十分に鑑賞もせず>とある。「飽く」は<満ち足りる>だから、「飽かで」は<十分ではなしに>だが、このままでは何を言っているのか分からない。そこで訳文は、下文に「花園見せ」とあることから、この「飽かで」を<十分に見ないで>としてあるのかと思う。古文の特性か作者の特性かは分からないが、こういう書き方の文に対しては、こういう先読みは有効だ。古文に馴れない私には、こうした訳は秀逸に思える。この「見」という一語で文意が一気に分かった。 *「語り出でたまへりし」は、注に<内大臣が玉鬢のことを。「帚木」巻の雨夜の品定めをさす。>とある。

とて、すこしのたまひ出でたるにも(殿が実父への引き合わせを少し口にお出しになったことだけでも)、いとあはれなり(姫にはとても感慨深いものがありました)。

「撫子のとこなつかしき色を見ば、もとの垣根を人や尋ねむ (和歌 26-01)

「撫でし子の常懐かしさ、床懐を思う人がいる (意識 26-01)

*注に<源氏から玉鬘への贈歌。「とこなつかしき」と「常夏」(撫子の別名)の掛詞。「もとの垣根」は母夕顔をさす。>とある。「とこなつかし」は「常懐かし」で<いつも愛らしい>。「常夏」は撫子が秋になっても花を咲かせるものがあることから付けられた異名。とのことだが、「常夏」は今の内大臣とは嘗ての頭中将が、姫の母である「夕顔」を<床が懐かしい人>に掛けて<撫子ならぬ常夏>と歌に詠んだ語であり、となると「とこなつかし」は「床懐かし(柔肌が恋しい)」との複意に違いない。一見した所、ベタな洒落に見えたが、どうやらこの歌は「雨夜の品定め」での夕顔と藤原殿との歌の贈答を下敷きに行っているようで、それらを見直して置いた方が良さそうだ。「帚木」巻第二章第三段にはこうある。夕顔贈歌「山がつの垣穂荒るとも折々にあはれはかけよ撫子の露(和歌 2-5)」。藤原殿答歌「咲きまじる色はいづれと分かねどもなほ常夏にしくものぞなき(和歌 2-6)」。だから、「もとの垣根」は「山がつの垣穂」を意識した語用なワケだ。勿論、「もとの垣根」は理屈の上でも<「撫子」の親元の居場所>を意味するだろう。「垣根」は花の縁語であり、撫子の縁語である。それ自体の意味は<囲い、仕切り>だが、それに囲まれた区域でもあり<住处、居場所>を意味したり、時には<敷地、領地>も示すかも知れない。が、後ろ盾をなくして彷徨った印象の夕顔の<居場所>に「垣根」の語感は馴染まない気がする。夕顔が自らを「山がつの垣穂」と詠んでこそ意味の立つ語用、と私には思える。なお、「色」は<花の色>であり<姫の見映え>でもある。で、歌筋は<撫子と母の常夏が呼んだこの娘の常しく懐かしい姿を見れば、父親の大臣は床敷く懐かしさを思い出して、その母親の居場所を知りたがることだろう>と読める。

*このことのわづらはしさにこそ(その内大臣のお尋ねに夕顔の急逝を告げなければならない辛さ故にしていた)、*繭ごもりも(口ごもりも)心苦しう思ひきこゆれ(気まづく思い申ししていました)」 *「このこと」は内大臣が夕顔の行方を詮索すること。と注にある。では、「わづらはしき」とは何なのか。「わづらはし」は<平穩無事に事態が収まらなさそう→厄介そう>で、「わづらはしき」はざっと<困難さ>ということなのだろうが、漠然とした言葉だ。が、続く「繭ごもり(まゆごもり)」を<口ごもり>と考えれば、「困難さ」は<夕顔の急逝>自体よりは<それを知らせること>にあると知れる。ということは、「にこそ」の「こそ」は「繭ごもり」の理由である「わづらはしき」を強調する副助詞で、「心苦しう」に掛かる係助詞ではない、ことになる。 *「繭ごもり」は、注に<「たらちねの親の飼ふ蚕の繭ごもりいぶせくもあるか妹に逢はずて」(拾遺集恋四、八九五、人麿)を踏まえる。>とある。注は「拾遺和歌集」に収められた柿本人麻呂の歌としてあるが、この引歌を Web 検索すると、万葉集 12-2991 の「繭」の寄物沈思の歌として「たらちねのははがかふこのまよごもりいぶせくもあるかいもにあはずして」がヒットする。そして此方が原歌、らしい。ついでながら、「古今和歌集序」にも六種の和歌の三番目の参照として、この万葉集の歌が<物にもなずらへ>という例で引かれている、ということが渋谷教授のアップロードにも示されている。といったようなことなので、お題が「繭」なのだから、この歌は<繭籠りと言えは有難い親心だが迷惑にもなるな、それであの子に会えないのだから>という筋だ。ところで、「たらちね」は<根源の、最愛の>みたいな意味で「母」に掛かる枕詞とのことだが、外来語か沖縄語みたいな印象だ。が、それはともかく、「たらちね」は子供の頃に落語で聞いて以来、未だに良く分からない言葉のままだが、京言葉ないし公家言葉みたいなものの感触を初めて得たのが、その「たらちね」という落語だったような気がして、未だに分からない事も含めて何となく何がしかの因縁を感じる語だ。なお、「繭籠り」の本来の意味は<庇護>だろうが、殿はこの照れ隠しめいた言い回しで罪深い自分を守っているのであり、殿が言う「繭籠り」の意味は「口ごもり」の洒落言葉に過ぎない、と読む。

とのたまふ(と殿は仰います)。君(姫君は)、うち泣きて(つい泣いて)、

「山賤の垣ほに生ひし撫子の、もとの根ざしを誰れか尋ねむ」(和歌 26-02)

「誰が尋ねてくれるやら、昔の名前で出ています」(意識 26-02)

*注に<玉鬘の返歌。「撫子」「尋ね」の言葉を引用し、「人や尋ねむ」を「誰か尋ねむ」と返す。「あな恋し今も見てしか山がつの垣ほに咲ける大和撫子」(古今集恋四、六九五、読人しらず)を踏まえる。>とある。が、「やまがつかきほ」は「雨夜の品定め」に於ける夕顔贈歌「山がつの垣穂荒るとも折々にあはれはかけよ撫子の露(和歌 2-5)」を丸々受けた語用であり、その踏襲であることこそが当歌の意味を知る鍵だ。つまり、当歌の直接の下敷きはむしろ夕顔贈歌だ。それでも、この引歌はその夕顔贈歌での下敷きとしても注釈されていて、「やまがつかきほ」自体の意味を知る上での参考にはなるだろう。「あな恋し」は<ああ恋しい>で、詠い出しの言い方だから<何と恋しいことか>くらいの表意提示か。「今も見てしか」の「てしか」は<～だとしたなら、良いのに>と説明され、「今も」だから<会えていたなら→会いたいものだ>。「やまがつ」はざっと<田舎者>。「かきほ」は<粗末な家>。「やまとなでしこ」は一般論なら<美しい娘>で、何かに掛かるのなら<誇るべき個性のある女>だ。が、この歌は背景が何も分からないから、一般論で通して読めば<実に恋しくて今すぐにも会いたいな雛にも稀な美しい娘に>という、意外なほど在り来たりの歌筋となる。なので、言い回しの語呂の良さの前に、「山がつの垣ほに咲ける大和撫子」には必ずや面白い背景があるに違いない。しかし、手近な資料では何も分からない。結局、「やまがつかきほ」という言い方に前例があると知っただけで、特別な意味は汲めなかった。しかしむしろ、夕顔贈歌の「山賤の垣穂荒るとも」という言い方から、「山賤の垣穂」が単に<田舎じみた粗末な家>というよりは<訳有って没落した家>という雰囲気濃い気がする。が、それもこれ以上は詰めようが無い。ところで当歌の意図は、殿の「もとの垣根を人や尋ねむ」に対して、「もとの根ざしを誰れか尋ねむ」と否して答えたものだが、その真意は、殿が「人」と内大臣への紹介を明示したことに対して、姫が「たれ」と実父を認識した上で殿に遠慮して明示を避けて今までのお世話に謝辞を示した、ということにあるのだろう。「もと」とは<殿が夕顔と知り合う前>を意味する。だから、殿の「撫子のとこなつかしき色を見ば」は、ただの褒め言葉ではなく、姫を<夕顔の娘=自分の女>ではなく<撫子の常夏>という藤原氏の親子関係という「色」として認識した、ことを示す。そして姫も、ただの謙遜では無く、「山賤の垣ほに生ひし撫子」と藤原殿が「雨夜の品定め」で明かした夕顔以前の<常夏>の言葉で自分を示す事で、殿の別れ話を受け止めた。だから泣かない姫も、つい泣いた。とすると、いつにない大人の場面だ。

はかなげに(頼り無さそうに)*聞こえないたまへるさま(お応え申していच्छるところは)、*げにいとなつかしく(なるほどたいそう懐かしく)若やかなり(若い女らしく素直に喜んでいるようでした)。*「聞こえない」の「ない」は「為し(～のようにする)」の音便、かと思うが、特に注も無い。ともかく、「聞こえ給ふ」とは違って「聞こえ(るような体をし)給ふ」と、姫の様子をわざと夕顔に重ね見る書き方、と読む。*「げに」は語り手が源氏の「とこなつかしき」と言った言葉を受けたもの。と注にある。だとしても、「はかなげに聞こえないたまへるさま」に在りし日の夕顔の姿を見たから、ではあるのだろう。

「*来ざらましかば(いっそ姫が当邸に、来なかった方が諦めが付く)」*注に<源氏の詞。「うち誦じたまひて」とあるので、引歌があるらしいが、未詳。>とある。「まし」は<もし～だったら>と事実と違うことを仮想する言い方とのこと。此処では、殿は変型ながら失恋したのであり<こんなに別れが辛いなら、いっそ逢えない方が良かった>みたいな歌謡曲がびつたりの場面、ではある。

とうち誦じたまひて(と殿はふと吟じなさって)、いとどしき御心は(ひとしお募るお気持ちは)、苦しきまで(苦しいほどで)、なほえ*忍び果つまじく思さる(未だに姫への恋情をととても諦め切れ

なくお思いです)。 *この「しのぶ」は「忍ぶ」ではなく、「偲ぶ」ないし「慕ぶ」かと思う。理屈では今が潮時と思っても、殿は「なほえ(やはりどうしても)」未練は断ち切れない、らしい。

[第六段 源氏、玉鬘への恋慕に苦悩]

渡りたまふことも(殿が西の対にお渡りなさるのが)、あまりうちしきり(あまりに頻繁で)、人の見たてまつり咎むべきほどは(多くの女房がお見受け申して噂に立つほどになると)、*心の鬼に思しとどめて(強く反省してお渡りは思い止まりなさり)、さるべきことをし出でて(その代わりに何かの理由を付けて)、御文の通はぬ折なし(お手紙を通わせない日はありません)。ただこの御ことのみ(殿は今、この姫のことだけが)、明け暮れ御心にはかかりたり(日々の御心に掛かっています)。 *「こころのおに」は<良心の呵責>と古語辞典にある。近年ではむしろ<邪心>のようにも使うようだが、此处では<気が咎める>という意味らしい。が、「良心の呵責」は公正さに照らして自分の言動を反省すること、かと思うが、殿は藤原殿の心証に配慮したのであり、自分の恋情自体には微塵も悪いと言う認識はなく、面倒を避けただけで人目を気にしているわけなので、手紙は止まらない、のだろう。

「なぞ(如何して自分は)、かくあいなき*わざをして(こうも始末の悪い真似をして)、やすからぬもの思ひをすらむ(気の休まらぬ思いをするのだろう)。*さ思はじとて(かといって、こんなに悩むことはない)、心のままにもあらば(本心のままに姫を表立って妻にしてしまえば)、世の人のそしり言はむことの軽々しさ(娘として世話していた女を我が物にしてしまうことへの、世間の誹りを受ける極まり悪さという)、わがためをばさるものにて(私への悪評はともかくとして)、この人の御ためいとほしかるべし(姫自身にとって望ましいものではないだろう)。 *「わざ」は<言動>で、具体的には姫への言い寄り、またはそれ以上を指すだろう。殿の「わざ」は諸侯が「心なびかしたまふ」(胡蝶第一章第三段)のとは違って、相当に強烈なものだったに違いない。それでも作者が、「生さぬ仲」だの「なからひ」だのと言わずに「わざ」とボカすのだから、言い換えも<マネ>とボカす。 *「さ」は苦しい思い、「心のまま」は玉鬘を自分の妻妾の一人にすることをさす。と注釈にある。

限りなき心ざしといふとも(非常に深く姫を愛していると言っても)、*春の上の御おぼえに並ぶばかりは(紫の上の御地位に並ぶ正妻というほどには)、わが心ながら(我ながら)えあるまじく(とても重く処遇し得ない)思し知りたり(とお考えでした)。 *「春の上」は紫の上、源氏の心中文中の呼称に注意。と注にある。この文では、殿の「心ざし」に「御」は付かず、上の正妻たる地位である「おぼえ」には「御」が付く。上を正妻に就けているのは殿だが、太政大臣の正妻と言う地位は相当に公的な意味が在ったのかもしれない。事実、紫の上は式部卿宮の実子と言う王家血筋ではある。が、殿が上を娶る経緯は相当にいかがわしく私的なものであったので、当時の身分世情を実感しない私のような読者は確かに分かり難い敬語遣いだ。

「さて(したがって)、その劣りの列にては(上に劣るその他の何人かの夫人の地位に過ぎないとなれば)、何ばかりかはあらむ(姫にとって藤原氏の面目は立たないだろう)。*わが身ひとつこそ(私自身だけこそは)、人よりは異なれ(人に抜き出た地位だが)、見む人のあまたが中に(世話を見ている多くの女の中に)、かかづらはむ末にては(連なる末席に着くとあっては)、何のおぼえかはたけからむ(姫にとっては、何の名誉が施せよう)。異なることなき納言の際の(並の参議の身分の男が)、*二心なくて思はむには(正妻に迎えようというのに比べて)、*劣りぬべきことぞ(私の妻妾となって裏方で生きるのでは、張り出しの良い姫にとっては宝の持ち腐れになって

しまうだろう)」 *「我が身」は注に「源氏は太政大臣の地位にあることをさす。「こそ一なれ」係結び、逆接用法。」とある。 *「ふたごころ」は「浮気心」または「背信」とある。だから「二心なくて思はむ」は「姫一人と添い遂げる」みたいな言い方には見えるが、当時の貴族、特に王家にあっては、一人の女を思い続けるのは決して尊ばれない。王には博愛が期待される。純愛を楽しむのも自由だが、それで社会的責任が果たされることは無い。文脈からして「二心なくて思はむ」は「一人を愛し続ける」のではなく「姫を正妻の地位に処遇する」である。 *「おとる」は比較下位を示すことが多いが、漢字表記は「劣る」の他に「損る」ともあり「価値を損なう」意味と古語辞典にある。少し冗長気味だが、今までの記事から姫の人柄を考えてこう言い換える。

と(と殿は)、みづから思し知るに(ご自分でも事情は良くお分かりで)、いといとほしくて(姫をたいそう思い遣って)、「宮(兵部卿宮や)、大将などにや許してまし(右大将などに妻として迎えることを許してしまおうか)。さてもて離れ(そのように縁遠くなり)、いざなひ取りては(夫となる者が、姫を引き取れば)、思ひも絶えなむや(諦めも付くだろうか)。いふかひなきにて(張り合いの無いことだが)、さもしてむ(姫のためには、そうすべきだろうか)」と思す折もあり(とお考えになる時もあります)。

されど(しかし日頃は)、渡りたまひて(西の対に出向きなさって)、御容貌を見たまひ(姫のお顔を御覧になり)、今は御琴教へたてまつりたまふにさへことづけて(この所はお琴を教えなされることに託けて)、近やかに馴れ寄りたまふ(近くで親しく寄り添いなさいます)。

姫君も、*初めこそむくつけく(殿の琴の教授を、初めの内こそ気味悪く)、うたてとも思ひたまひしか(厭だとお思い為さったが)、「かくても(こうして近付いていても)、なだらかに(穏やかで)、*うしろめたき御心はあらざりけり(琴の手ほどきに託けて体に触れようとする下心はお持ちで無く、実父への引き合わせも出任せではなさそうだ)」と、やうやう目馴れて(次第に安心して)、*いとしも疎みきこえたまはず(特には嫌な顔はお見せ申しなさらず)、 *「はじめ」は「今は御琴教へたてまつりたまふ」を受けた言い方、に違いない。そう補語する。仮に是がコトの初めだとすれば、殿が初めて姫の手を握ったのは四月の半ば過ぎの「五月待つ」頃であり、それからの殿の攻勢は猛烈で、情交を強く感じさせるほどの記事までであったのだから、今さらの初々しさは白々しいだけで意味が無い。そして五月四日には兵部卿宮を交えての蛸遊びまであり、姫は時に殿の女になる立場を受け入れる気に成ったかの場面も在ったが、基本的には藤原殿の娘としての自尊心を満たしたいので、殿の中途半端な態度を非常に不満に思っている。だから、その「変態」のままで事態が進むのは、「むくつけし」であり「うたて」あるもの、なのだろう。ところが、殿は藤原殿に別の落し種の娘が現れたことを知ったこの五月末ないし六月初めになって、今こそがこの姫を藤原殿に引き合わせる好機と考えて、その際に自分を無心な保護者という恩人の立場に立つ体裁を整える為に、姫への恋情を断ち切ろうと思いついたのであり、その方針を姫にも伝えたが、姫は半信半疑で、殿も実際に可愛い姫を見ると決心が鈍る、というのが此処の場面、かと思う。そのように、この文を読む。 *「うしろめたき御心」の「やましい下心」は、琴の教授を口実に女房の前でも大胆に体の接触を迫ること、であり、本気で藤原殿に引き合わせる気が無いこと、でもあるのだろう。とはいえ、殿は琴を教えること自体が目的なのでは無く、それはやはり姫と親しく近付いていたいからなのであり、姫の方も琴を教わること自体を望んでいるのではなく、それが藤原殿に繋がる話題であり、延いては実父に会う下準備のような位置付けにも思え、その認識を殿と共有していることを望むし、共有は出来ていそうで、その意味で今の関係を上手く進めたい、時には殿の機嫌も取ろう、といった所なのだろう。 *「いとしも」の「いと」は恐らく慣用句で「非常に」というほどの意味ではなく「気になるほど」くらいの語感で、「いとしも」も「そんなにひどくは」ではなく「特には、さほどは」くらい、かと思う。

さるべき御応へも(殿のご指導に理解をお示しなさる、その都度のご返事も)、馴れ馴れしからぬほどに聞こえかはしなどして(睦言ほどは馴れ馴れし過ぎないように申し交わしなどして)、見るままにいと愛敬づき(会う度ごとにそれは愛想が良くなり)、薫りまさりたまへれば(美しさも増していっしょるので)、なほ*さてもえ過ぐしやるまじく思し返す(やはり殿は他の男に姫との結婚をととても許せるものではないと思し返しなさいます)。 *「さてもえ過ぐしやる」の「さても」は、「されど渡りたまひて」と姫の顔を見直す前の「さもしてむ」との考えであり、それは即ち「宮、大将などにや許してまし」である。しかしいざ姫の顔を見れば、それで「過ぐしやる(済ませてしまう)」ことが「まじくおぼしかへす(出来ないと考え直しなさる)」のである。

「さはまた(それでは別の形で)、さて(他の男と結婚はさせたとして)、ここながらかしづき据ゑて(姫は当家で世話して住ませたままにして)、さるべき折々に(時折)、はかなくうち忍び(こっそりと部屋に訪ね入って)、ものをも聞こえて慰みなむや(親しく話して心を通わせようか)。かくまだ*世馴れぬほどの(これまで姫のまだ床仕種に馴れていない)、わづらはしさにこそ(後始末の面倒さには)、心苦しくはありけれ(気苦労したものが)、おのづから*関守強くとも(結婚すれば、当然亭主の見張りは厳しいだろうが)、*ものの心知りそめ(姫が通い夫との情交を重ねて経験する事で、床捌きの何たるかをしり)、*いとほしき思ひなくて(男の体を変に思うこともなく)、わが心も思ひ入りなば(私も真心を込めて愛せば)、しげくとも障はらじかし(激しく何度でも抱けるだろう)」と思し寄る(と考え付きなさいます。)、いとけしからぬことなりや(全く以って、実にけしからぬことです)。 *「世馴れぬほど」は与謝野訳文に<処女>とある。私もそうスパッと言い切ってしまうに欲求には駆られるが、今までの思わせぶりな記事が勿体無くて躊躇する。「世馴る」は<男女の情を知る>とあるが、気持ちとしての情ではなく世の中の人付き合いとして馴れるのだから、実際に<情交する>ことを言うのであり、それを「馴れぬ(知らない)」のだから<処女>なワケだ。だから、付け込むとすれば「ほど」だが、これも文型上で「わづらはしさを言うだけのもの、なのかも知れない。が、やはり付け込む。「ほど」は<程度、状態>であり、具体的な性愛方法や事後処理あたりのこと、とも決じ付けられそうだ。 *「せきもり」は一般的には<関所の番人>で此処では比喩的な語用らしい。注には<「関守」は玉鬘の夫をさす。>とある。 *「ものの心」は注に<主語は玉鬘。玉鬘が男女の情を知るようになる。>とある。が、「もの」は<床あしらいの方法>であり、「こころ」は<その成り立ちや意味>、かと思う。 *「いとほしき思ひなくて」は<源氏側の思い。『集成』は「こちら(源氏)も、仮にも娘分をと、ひるむ気持がなくて」。『完訳』は「「心のままにも--いとほしかるべし」に照応。女が夫ある身なら不憫さも感じまい、とする」「こちらでもいたわしく思う気がねがなくなるわけだし」と注す。>と注にある。確かに姫が他の男と結婚すれば、姫の立場ははっきりするので、殿も姫自身も身分に付いて先行きを案じる必要は無くなるのかも知れない。が、こういう三角関係自体の不安定さは如何に見るのだろう。それに、次いで「わが心も」とあるので、此処までは姫が主語、のようにも私には見える。が、それにしても、此処から下への文は良く分からない。で、なるべく「けしからぬ」風に言い換える。

いよいよ心やすからず(殿はますます気が休まらず)、思ひわたらむ苦しからむ(考えるほど悩みが深くなります)。なのめに思ひ過ぐさむことの(簡単に忘れてしまいなさいることが)、とざまかくざまにもかたきぞ(どうにもこうにも出来ないと言うのが)、世づかずむつかしき*御語らひなりける(世にも稀なややこしい御二人の物語なのです)。 *「かたらひ」は<話し合い>で、「御語らひ」は<御二人の話し合い→睦まじい仲>みたいにも見えるが、「むつかし(面倒な)」という修辞があるのだから、これは「語らひ種」に掛けた揶揄気味な言い方、なのだろう。

[第七段 玉鬘の噂]

内の大殿は(うちのおほとのは、内大臣は)、この今の御女のことを(このいまのおんむすめのことを、その新たに見つかった御息女のことを)、「殿の人も許さず(邸内の人々も姫と認めず)、軽み言ひ(軽んじて話題にし)、世にも*ほきたることと誹りきこゆ(世間でも呆れた事と悪口を言っている)」と、聞きたまふに(聞いていらしたが)、 *「ほく」は「惚く」とあり<呆ける、惚ける>と古語辞典にある。

少将の(御次男の少将が)、ことのついでに(何かの折に)、太政大臣の(おほきおとどの、源氏殿が)「さることや(そういうことがあるのか)」ととぶらひたまひしこと(とお尋ねなされたことを)、語りきこゆれば(お話し申せば)、

「さかし(そうとも)。そこにこそは(あそここそ)、年ごろ(長年)、音にも聞こえぬ山賤の子迎へ取りて(音沙汰の無かった田舎娘を迎え取って)、ものめかし*たつれ(大層に仕立てているではないか)。をさをさ人の上もどきたまはぬ大臣の(滅多に人の身の上に取り立てて論評なさらぬ源氏殿が)、このわたりのことは(当家のこととなると)、耳とどめてぞおとしめたまふや(聞き耳を立てて難癖を付けなさる)。これぞ(最高位官に御注目頂くとは、全く以って)、*おぼえある心地しける(名誉なことだ)」 *「たつれ」は他動詞「立つ(成り立たせる、仕立てる)」の已然形。「そこにこそ」を受ける。 *「おぼえあるこち」は注に<皮肉>とあるようだが、親近感のある<冗句>でもありそうで、藤原殿がどれくらいの温度で源氏殿を考えているのかは、複雑そうだ。

とのたまふ。少将の、

「かの西の対に据ゑたまへる人は(大臣があつた西の対に住まわせなされている人は)、いと*こともなきけはひ見ゆるわたりになむはべるなる(実に優れた人物と思われる方のように御座います)。兵部卿官など、いたう心とどめてのたまひわづらふとか(相当熱心に求愛なさり思い詰めていらっしゃるそうです)。おぼろけにはあらじとなむ(並大抵の姫ではあるまいと)、人びと推し量りはべめる(人々は思っているようです)」 *「こともなし」は<たいしたことない→平凡だ>という意味にもなるし、<難が無い→優れている>という意味にもなるらしい。此处では後者のようだが、随分と漠然とした言い方のように見える。確かに直接には面対していないのだから、あまり詳しくは知らないのかも知れないが、弟分の源氏中将に聞けば、それなりに容貌や人柄などを窺い知ることが出来るだろう。いや、もしかすると、源氏中将を引き合いに出すことこそが内大臣の前では憚られた、という事情はあるのかも知れない。それにしても「けはひ(雰囲気)」や「わたり(～らしい人)」という曖昧さは何なのだろう。自分たち藤原家兄弟の姫への懸想を父大臣に極力伏せて置きたい、という心理の表れなのだろうか。私には分かり難い語用だ。

と申したまへば、

「いで(いや)、それは、かの大臣の御女と(かのおとどのおんむすめと、あの源氏殿の御令嬢なら)思ふばかりのおぼえのいといみじきぞ(秀逸を見込んでいるだけの世間の思惑がとても大きいということだ)。人の心(多くの人の思いは)、皆さこそある世なめれ(皆そうしたものになるのが世の中だ)。かならずさしもすぐれじ(実際には、そう優れているとは限らない)。*人びとしきほどならば(それなりの身分の母親から生まれたのなら)、年ごろ聞こえなまし(何年も前か

ら評判になっていただろう)。*「人びとしきほど」は与謝野訳文の<相当な身分の母親>に従う。「ひとびとし」は<人並みだ>と古語辞典にあるが、この階級社会に於いて藤原殿が言う<人並み>とは客観的に見て<相当な、それなりの>に違い無い。そして「人びとしき」と概念付けられる「ほど」は<一般的な能力の程度>ではなく端的に<身分>であり、出自に規定される「身分」は<母親の家格>となる、ようだ。

あたら(折角)、大臣の(源氏殿が)、塵もつかず(欠点もなく)、この世には過ぎたまへる御身のおぼえありさまに(現世で最上でいらっしゃるご自身の声望でありながら)、おもだたしき腹に(正妻腹に子を儲けて)、女かしづきて(姫をお世話して)、げに疵なからむと(まことにご安泰と)、*思ひやりめでたきが(御家繁盛を期する縁が)ものしたまはぬは(いらっしゃらないとは)。*「おもひやり」は<心配り、気遣い>を言うことが多いが、此処では<将来への展望>であり、それが「めでたし(喜ばしい)」のだから、通せば<御家繁盛が見込めるもの>。女は入内が見込める、という事情をいうのだろう。「めでたき」という連体形は其自体で<姫>を意味する名詞とも取れるし、名詞の省略とも取れそうだ。

おほかたの(大臣は大体が)、子の少なくて(子供が少なくて)、心もとなきなめりかし(心細いのだろう)。劣り腹なれど(妾腹ながら)、明石の御許の(あかしのおもとの、明石御方の)産み出でたるは*しも(産んだという娘には恐らく)、さる世になき宿世にて(稀有な運命を宿しているの)、*あるやうあらむとおぼゆかし(立后などがあるだろうとも思えるが)。*「しも」は<強調の副助詞>なのだろうが、「産み出でたる」<ものこそは>というより、「あらむ」に結ぶので<高い可能性を推量する「もしや」という言い方>のように見える。*「あるやう」は<何らかの体裁→然るべき出世>あたりで、具体的には<立后など>かと思う。

その今姫君は(その新しい姫君は)、*ようせずは(ひよつとすると)、実の御子にもあらかし(実の娘御では無いかも知れない)。さすがにいとけしきあるところつきたまへる人にて(女御を差し置いて立后させた梅壺中宮のように、妙な事情で父娘の縁をお持ちになる人なので)、もてないたまふならむ(他人の子でも、お世話なさるのだろう)」*「ようせずは」は<悪くすると→順当でないとする→ひよつとして>。

と、言ひおとしたまふ(悪く仰います)。

「さて、いかが定めらるなる(婿ほどのように決まるのだろう)。親王こそまつはし得たまはむ(やはり兵部卿宮が手を回して姫を得なさるのだろうな)。もとより取り分きて御仲よし(宮はもともと大臣とは特に御仲が良くて)、人柄も*警策なる御あはひどもならむかし(性格も互いに励まし合うという御兄弟仲らしいし)」*「警策(きやうざく)」の「策」は<馬にあてるムチの意>と古語辞典にあり、<人を驚かせるほど立派なこと>と語意の説明がある。だとしたら、内大臣は源氏の今姫君、とは実は内大臣の実子だが、を現時点では「警策」という褒め言葉で修辞する心算は無さそうだから、この「御あはひども」は<宮と姫との取り合わせ>ではなく<宮と大臣との間柄>と取るべき、に見える。また作者が、もしムチの語感を意図して使った語だとしたら「警策」には<競争相手→互いに張り合う→励まし合う>の意味合いが有る、とも思う。

などのたまひては(などと仰っては)、なほ(更に内大臣は)、*姫君の御こと(二の姫の御ことを)、飽かず口惜し(相変わらず残念がって、)。「*かやうに(その今姫君のように)、*心にくくもてなして(我が二の姫もさも恭しく世話をして)、*いかにしなさむなど(どうするつもりだろうかなど

と)、やすからずいぶかしがらせ*ましものを(世間を惑わしてやきもきさせてやりたかったものを)」とねたければ(とその楽しみを奪った源中将が気に入らないので)、*位さばかりと見ざらむ限りは(相当に出世しない内は)、許しがたく思すなりけり(二人の結婚は許せないとお思いなのでした)。*「ひめぎみ」は注に<雲居雁をさす。>とある。一姫の正妻腹の弘徽殿女御とは別腹の、いわば劣り腹の姫だが、大宮に養育を頼んで大事に育てた内囲いとしての二人目の女子。新たに現れた内大臣の落し種はまだ年齢未詳で、対の姫は22歳と見做され、この二の姫は17歳ほどかと思われるので、歳順では二番目の姫ではなさそうだが、内大臣にとって幼少から娘として見て来た二人目の姫だ。と、「二の姫」の言い方にこだわるのは、この姫を「雲居雁」姫と呼称することが、少なくとも今の時点では、その人物像に見合う重さを表すものには私には思えないからだ。今から三年前の秋に、少女巻第五章第一段で内大臣の監視が厳しくなって、姫が若君との仲を裂かれる時の夕暮れの寂しさに呟いた「雲居の雁もわがごとや」が、この呼称の元になっているようだが、「雲居雁」という語に弓削皇子(ゆげのみこ)と紀皇女(きのひめみこ)の悲恋話が当時の宮廷読者には連想されたらしいことを既に見た。二人は異腹ながら共に天武天皇の子で禁忌の兄妹恋に落ち、更に共に持統女帝腹でなかったことから政争に敗れて早世したり抹殺されたらしいことが万葉集などに残された歌から窺える、とあり、敗戦者故に公的な残存資料は少ない、とされる。だから実情は分からないし、当時の人々が如何思っていたのかも不明だ。それでも、源中将と二の姫も血縁の近い従姉弟同士であり、悲恋を嘆く、少なくとも嘆きたい、という事情ではあるのだから、弓削皇子と紀皇女の事も其れに類する認識だったようには類推できる、気がする。つまり、二の姫が悲恋を嘆いて秋の夕空を飛んで行く雁の声に誘われるままに「雲居の雁もわがごとや」と呟いてみたい気持ちと、姫自身を非業の死まで思わせるような「雲居雁」という語で呼んでしまうことには、その重さに違いが有り過ぎる、と私は思う。強いて言えば<「雲居の雁」とつぶやいた姫>だが、そんな間延びした呼称も無いだろう。因みに、源中将15歳、藤中将21歳、今上帝18歳、弘徽殿女御19歳、中宮27歳、更には明石姫君8歳、明石御方31歳、紫の上28歳、源氏殿36歳、そして内大臣藤原殿42歳、といったところがこのところの話題に上る主要人物のおよその年齢。各年齢は明示に従うのは絶対だが、推定に於いては文中の曖昧表示と共に話の辻褄にも気をつけたい。*「かやうに」とは源氏が玉鬘を大事にするように、の意。と注にある。*この「心にくし」は、その主体が他人の為ではなく自分の為に<配慮が行き届いている>ので、<勿体ぶって、さも恭しく>の意。*「いかに」は注に<世間の人の噂を想定。>とある。*「まし」は<反実仮想の助動詞>と注にある。*「くらみさばかり」は注に<夕霧の官位をさす。>とある。

大臣なども(源氏殿などが)、ねむごろに口入れ(丁重に口添えを)*かへさひたまはむにこそは(よくよく申し入れなさりでもすれば)、負くるやうにてもなびかめと思すに(根負けしたような形にしてでも二人の結婚に同意しようかとお思いになるが)、男方は(をとこがたは、当の中将は)、さらに焦られきこえたまはず(一向に焦った風を見せなさないの)、心やましく*なむ(内大臣はさぞご不満だろうかと)。*「かへさひ」は「かへす」に反復の助動詞「ふ」の連用形が付いたもの、だろうか。だとしたら、「かへす」は<(私を源氏殿が)翻意させる>では、何度も翻意してしまうから奇怪しい。ところで、「かへす」にも<反復>の意がある。だから多分、「かへさひ」は「口入る<口添えする>」の助動詞として<かえすがえず、よくよく~する>の意味を取る、のだろう。そして、その粘り強さに「負くるやうにて(根負けした形で)」「なびかめ(同意しようか)」という所なのだろう。*「なむ」は強調の係助詞で、且つ言い切りで、言葉を濁す印象付けの言い方、かと思う。

[第八段 内大臣、雲井雁を訪う]

とかく思しめぐらすまに(とこのように内大臣は二の姫のことを思い巡らしなざると)、*ゆくりもなく軽らかにはひ渡りたまへり(前触れもなく気軽に姫のお部屋に向かいなさいました)。

少将も*御供に参りたまふ(少将も御供して参りなさいます)。 *「ゆくりもなく」は「ゆくり」が<申し送り>みたいな名詞で、まとめて<前触れもなく>となるように見えるので、渋谷訳文に従う。が、「ゆくり」は古語辞典に名詞としての掲載は見当たらない。辞書には「ゆくりなし」という形容詞が<突然である、不用意だ>と説明されているが、「ゆくりか」という形容動詞も<思いがけないさま、不用意なさま>とあって、「ゆくらか」という形容動詞が<ゆったりしているさま>とあることを見ると、「ゆくる」という動詞に<波が繰り返して寄せ来る>という意味でもあったかの語感を思う。が、「ゆくる」という語の掲載は無い。だからこのノートは根拠の無い全くの言葉遊びだが、言葉には誤解や曲解は付きもので、もしかするとそれこそが新しい概念や、事柄の新しさなのかも知れない。例えば、仮に施政者や権威筋がある言葉に定義付けを行ったとしても、結局はその言葉でどれ程多くの人と同じ概念を共有出来るかに、その言葉の実効性は依存するものだ。言葉が個人のものでなく、人間のものなのは自明だ。何か、そんなことを考えさせる「ゆくり」だった。

姫君は、昼寝したまへるほどなり(昼寝を為さっている所でした)。*羅の単衣を(うすもののひとへを、夏用の薄手の着物一枚を)着たまひて臥したまへるさま(着て横になっていらっしゃる姿は)、暑かはしくは見えず(暑苦しそうには見えず)、いとらうたげにささやかなり(とても可愛らしく小柄です)。 *「羅」は「うすもの」と読みがあり<うすく。織った織物。紗や絹の類。>と古語辞典にある。また「羅(ら)」については<網目のように織られた薄地の絹の織物。うすもの。>と大辞泉にある。網目状だから目が粗い物は透けて見える織物だ。

*透きたまへる肌つきなど(姫の瑞々しくいらっしゃる肌具合などが薄物から透けて見えていらして)、いとうつくしげなる手つきして(とても美しい手つきで)、扇を持たまへりけるながら(扇をお持ちのまま)、かひなを枕にて(腕枕をしていらして)、うちやられたる御髪(寝乱れた御髪の様子)、いと長く*こちたくはあらねど(とても長くて豊かなのではないが)、いとをかき末つきなり(先端までとても艶があります)。 *「透きたまへる」は<瑞々しくいらっしゃる>で「肌」の状態を修辭し、<着物から透けて見えていらっしゃる>で「肌」の見え方を説明する掛詞、だろう。 *「こちたし」は「言痛し、事痛し」と表記され<人の口がうるさい。煩わしい。>とか<ことごとしい。おおげさだ。>と大辞泉にあるが、他に<たくさんである。量が多い。程度がはなはだしい。>ともあり、注記に<奈良時代では多く人のうわさについていう場合が多いが、平安時代になると、霜の置くさま、毛髪の多いさまなどにいう。>とされ、此处でも御髪についての語用で単に<毛の量の多さ>を言う言い方らしく、否定的な語感はなく、むしろ肯定的な価値観での客観的な形態説明と言った語感のようだ。

人びとももの後に寄り臥しつつうち休みたれば(女房たちも几帳の後などの物陰に寄って横になって寝ていたので、殿の御出むきに気付かず)、ふともおどろいたまはず(姫は殿の前でもはっとは目覚めなさない)。扇を鳴らしたまへるに(殿が扇を鳴らしなされると)、何心もなく見上げたまへるまみ(何気なく見上げなされる姫の目が)、らうたげにて(幼げで)、つらつき赤めるも(寝起きの顔が赤らんでいるのも)、親の御目にはうつくしくのみ見ゆ(親の目には可愛らしいばかりに見えます)。

「うたた寝はいさめきこゆるものを(うたた寝はいけないと注意していたものを)。などか(何と)、いともものはかなきさまにては大殿籠もりける(まただらしな格好で寝ていらしたものだ)。人びとも近くさぶらはで(女房も近くに控えていないとは)、あやしや(なっていない)。

女は、身を常に心づかひして守りたらしむるべき(身支度を常に気を付けて整えているのが宜しいのです)。心やすくうち捨てざまにもてなしたる(部屋の中だからと、気を弛めて裸同然で居るのは)、品なきことなり(見っとも無いのです)。

さりとして(とあって)、いとさかしく身かためて(あまり畏まった正装で)、不動の*陀羅尼誦みて(ふどうのだからよみて、不動尊を崇める原語経文を念じて)、印つくりてゐたらむも憎し(手を印に結んで座禅しているというのも見苦しい)。うつつの人にもあまり気遠く(モノノケでもない、普通の人に過剰に用心して)、もの隔てがましきなど(遠ざけようとするなどは)、気高きやうとても(上品ぶっていても)、*人にくく(了見の狭い人嫌いで)、*心うつくしくはあらぬわざなり(人を魅了できる心構えではありません)。 *「陀羅尼」は<原語至上主義の仏典>と古語辞典にある。インド古文だろうか。全く分からない。 *「人憎し」は<愛想が無い>とある。ただ、人の来訪に見向きもせず座禅を組んで経を読み続けているとしたら、「愛想が無い」のは外形的に自明であり、殿が重ねて言い含めるものとしては中身が薄すぎるようにも見える。で、この文は殿が姫に意見するという場面だが、源氏殿とは違う藤原殿ならではの教育方針を作者が示そうとしている、と読むと興味深い。即ち、学問や仏典学識による権威で政治力を示そうとする源家に対して、藤家は各地に配した部下たちの人心掌握によって勢力を誇示しようとした、らしい記事だ。だから「ひとにくし」を<了見の狭い人嫌い>と言い換える。 *「心うつくし」は<可愛らしい、素直だ>とある。これも藤原バイアスを掛けて読めば、息女の入内と立后によって摂関政治の実権を狙う立場なのだから、<帝の心を掴むような人格に育てる>ことは姫君教育の基本でさえあるだろうし、より広く<人を魅了する>社交術こそは貴女の武器であり存在意義でもありそうだ。「うつくし」は人の目に映る姿、とは他人が受けるその人の印象、という語感に私には見える。

太政大臣の(おほきおとどの、源氏殿の)、后がねの姫君(后候補の姫君に)ならはしたまふなる教へは(しつけていらっしゃるという教育は)、よろづのことに通はしなだらめて(様々な行儀作法や学識文化教養を満遍なく身につけて)、かどかどしきゆゑもつけじ(際立った専門知識や学芸に偏らず)、たどたどしくおぼめくこともあらじと(また知らないことに間誤付くことも無いように)、*ぬるらかにこそ掟てたまふなれ(緩やかで応用の利くような方針を立てていらっしゃるようです)。 *「ぬるし」は<生暖かい、熱心でない、軟弱だ>などもあるが、此処では<厳しくない、緩い>ということで、その心は<応用が利く>なのだろう。

げに(確かに)、さもあることなれど(それも一理はあるが)、人として(人というものは)、心にもするわざにも(考えに於いてもする事に於いても)、立ててなびく方は方とあるものなれば(特に興味が向く方面はそれぞれにあるものなので)、生ひ出でたまふさまあらむかし(成長するに従って、生来の特徴は必ず表れることでしょう)。この君の人となり(その姫君が成人して)、宮仕へに*出だし立てたまはむ世のけしきこそ(春宮に入内させなされる時の源氏殿の御権勢のほどこそが)、いとゆかしけれ(実に興味深い) *「いだしたてたまはむ」は注に<主語は源氏。>とある。であれば、「世のけしき」は単に<その入内する時点での世情>ではなく、その入内時点での<殿の政治家としての地位>を意味する、と思う。この藤原殿の御意見は、育て方も大事だろうが、姫の個性を封じることは出来ないし、帝との相性は本人次第で、結局は後見者たる親の政治力が後の地位を左右する、といった論旨、かと思う。

などのたまひて、

「*思ふやうに見たてまつらむと思ひし筋は(そなたも最上の形で入内して頂きたいと考えていた私の目論見は)、難うなりにたる御身なれど(適わなくなってしまった御事情だが)、いかで人笑はれならずしなしたてまつらむとなむ(どうにかして世間の物笑いにならないようにして差し上げようと)、人の上のさまざまなるを聞くごとに(いろいろな人の身の上話を聞いては)、思ひ乱れはべる(考えあぐねているのです)。 *「おもふやう」は<理想的だ>と古語辞典にある。思う様、思いのまま、思う存分、といったところか。藤氏長者が娘に期すると最上の形は入内した上での<立后>かと思う。「見たてまつる」は「見る(世話をする)」の謙譲語で<お世話申し上げる>だが、「らむ」と聞き手に直接意向を話しているのだから<入内していただく>という丁寧ながら話者の管理による拘束性のある言い方、に見える。

試み事にねむごろがらむ人の*ねぎごとに(試しに声を掛けて気の有りそうに言う人の口説き文句には)、な*しばしなびきたまひそ(決して少しも気を許しなさいますな)。思ふさまはべり(私に考えがあります)」 *「ねぎごと」は「祈ぎ事」と表記され<願い事>と古語辞典にある。が、「ねぐ」は「祈ぐ(祈る、祈願する)」の他に「労ぐ(ねぎらう、いたわる)」が掲載されていて、此処では如何にも後者の意に見える。ただ、確かに「口説き」は「頼み事」や「願い事」のような言い方になる場合は多いのかも知れない。それでも、神仏に願う心というよりは、人付き合いの相手に話しかけて気を引いて誘うこと、と少なくとも第一義には考えないと「試み事」の軽い楽しさが無い。注に<夕霧の訴えをさす。>とあり、実際には数打つ中の「試み事」ではなく<真心からの恋情>なのだろうが、内大臣は憎しみを込めてこう言うのだろう。 *「しばし」は「しばらく」であり<もう少し待て>という語感だ。源中将との仲を<暫く待て>ということは、<いずれは許す>という意味になる。「思ふさまはべり」にそう言う含みが在ると読むことは出来そうだが、「試み事」という表題の文理からすれば、「しばし」はやはり<ほんの少しも>と読む方が素直だ。となると、「思ふさまはべり」は<他の相手を考えている>か<「試み事」で無いことが納得できなければ許さない>くらいの意味になりそうだ。いや、これは姫が殿の言葉を如何受け止めるかという意味であり、言い換えは<考えがある>として置けば無難だ。

など、いとらうたしと思ひつつ聞こえたまふ(殿は姫をととても可愛いと思いながらお話なさいます)。

「*昔は、何ごとも深くも思ひ知らで(何ごとも深くは考え至らず)、なかなか(むしろ)、さしあたりていとほしかりしことの騒ぎにも(引き取られる時に当たって嫌がって騒いでは)、*おもなくて見えたてまつりけるよ(臆面も無く殿にお会い申ししていたものだ)」と、今ぞ思ひ出づるに(姫は今さらに思い出しては)、胸ふたがりて(殿の御配慮に申し訳ない気持ちで胸がいっぱいになって)、いみじく恥づかしき(ひどく恥づかしかったのです)。 *「昔」は注に<三条宮邸にいたころをさす。>とある。大宮邸から内大臣が自邸に姫を引き取ったのは三年前の秋だ。今は六月だから、ほぼ丸三年前になる。当時、姫は14歳、源中将は12歳、とされる。具体描写は無かったが「少女」巻第三章第六段で、殿は姫と若君の仲を側付き女房たちの陰口を立ち聞きして知るのである。その側付き女房たちは、同第三章第一段で幼い二人が恋文の始末を雑にしていたのを目にして仲を知った、ような書き方だった。それは即ち、淡い恋心などでは無く、いちゃつきや戯れでも無く、男女の契りを思わせる「柔肌が恋しい」などの文か、または証文のようなもの、だったのだろう。が、側付き女房なら閨の始末自体も見知っただろうし、そうした話もしていたのだろう。殿はそれで噂は本当だったと知り、姫を大宮邸から自邸に引き取った、のだった。 *「おもなし」は「面無し」と表記され<面目ない、恥じる>の意と、逆に<あつかましい、恥知らずな>の両意が古語辞典に記されている。「今ぞ」「恥づかしき」と過去を述懐しているのだから、此処では後者の<臆面も無く>の意らしい。

大宮よりも(大宮からも)、常におぼつかなきことを恨みきこえたまへど(絶えず様子が分からない事を嘆いて顔を見せるようにと手紙で申し為さるが)、かくのたまふるがつつましくて(殿がこのように仰るのが憚られて)、え渡り見たてまつりたまはず(大宮邸には一度もお出向きなさいません)。